

回 想

(Looking Back, 1962)

サマセット・モーム著

(田原創訳)

第 1 部

(Show, June, 1962)



シャンフォール (1741～1794、フランスのモラリスト) が『逸話と警句』(*Anecdotes et Bons Mots*) の中である男の話を語っているのだが、その男は30年にわたって夜は愛人と過ごすことにしていたが、妻が死んで友人からその愛人と結婚するよう勧められた。「でも、もしそんなことをしたら」とその男は言った。「もはやどこで夜を過ごせばいいのか私には分からなくなるだろう」私も、似たような、その男ほどロマンチックではないが、困った状況にある。というのも、記憶にある限り、私は朝をライティング・テーブルで過ごしてきた。今や最後の本を書き終えたものだから、朝をどう過ごしたらいいか自問しているのである。

一時期、私が考えていたのは、愚かな考えかもしれないが、自分が全作品には何かパターンのようなものがあってほしいということだった。私はランベスのスラム街を扱った小説でフィクション作家としてのキャリアを始めたので、それにふさわしく最後の作品はバーモンジーのスラム街を扱い、それでパターンを完成させるべきだと思えた。私が幸運だったのは、古くからの友人で秘書のアラン・サールが一時期テムズ川の南で貧しい若者向けのクラブを運営していたことがあったので、彼を通じてその地区の多くの住民たちのことを身近に知ることができたことだ。彼らの住環境はひどいものだった。夫婦が成長した子供3人と小さな部屋2つに住んでいた。壁紙は隠れている虫のせいで汚らしくねじ曲がっていた。失業中の青年にとって、兄弟が汗して稼いでいることは苦々しい屈辱であり、兄弟から彼の食べ

る食糧を出し惜しみされるという侮辱に耐えなければならないことに私は気づいた。仕事にありつきたくて職業紹介所で待たなければならない時間の長いことや、大勢の希望者を扱う小役人が短気で怒りっぽいことを知った。夜の暗闇の中で扉に寄り掛かって性交するのは、恋人たちが性欲を満たすのにそれよりいい場所がないからだ、みだらな笑いとともに聞かされた。ウェストエンドで聞くものよりも情熱的で激しく狂おしい情事のことも聞いた。いろいろな苦労の種を別にすれば、バーモンジーの人たちは気のいい連中だった。女が病気だと、隣人が入って来て、皿洗いをし、料理を手伝うのは間違いないだろう。彼らはユーモア感覚で苦しい状況を受け入れていた。笑いを得ることができないとしたら、それはかなり悪い状況だが、土曜の夜に近所のパブでビールを1,2杯飲むだけの金は常にあった。

やがて、私は必要とするほとんどすべての材料を手に入れた。私が語ろうとする物語はいろいろな細かいことも加わって心の中で鮮明になり、一役買うべく作られた登場人物たちともうちとけた。書き始めるしかなかった。初秋には仕事を始めようと思った。1939年のことである。戦争が勃発した。ほかにやるべきことがあると思った。小説は脇へ置いたが、心に留めておいて、戦争が終わったら書こうと決めた。だが、戦争が終わって、再びバーモンジーに行き始めると、私が知っていたのとはえらく違う場所になっていた。ひどい被害を被っていた。ある晩、大群衆がガードの下に避難場所を求めたが、直撃を受けた結果、300人以上が——男も女も子供も——即死したのだった。立ち並ぶ家々はこなごなになっていた。だが、私が南ロンドンに戻った頃には、多くが建て直されていた。私が一番よく知っている家族は州議会アパートに住んでいた。その家族は余裕を持つことなど想像もしたことがなかったのだが、それ以上に稼いでいた。身なりをきちんとしていた。蓄音機を持ち、週に2回は映画に行った。だが、私が気づいた大きな変化は物の見方だった。かつては概して満足している人たちだった。嫉妬心がなかった。今やむっつりして不満そうだった。賃金は、その家族が言うには、不十分だし、労働時間は長すぎるし、搾取されているし、我慢するつもりはないのだった。昔は川向こうの人たちと関わることはなかった。自分たちとは関係のない世界であり、興味もなかった。今や、自分たちの金でどうしてあいつらが楽をしなければならないのかと疑問を投げかけるのだった。だが、それに留まりそうになかった。あまりにも長いこと不当な仕打ちに耐えてきたので、今こそ仕返しするつもりだった。私は、自分が知っていた状況はもはや存在せず、語るべき物語は本当らしく聞こえないことを悟った。その物語を語っても意味がないので、私はその小説を書かなかった。お粗末な話だが、パターンは未完成のままだ。

ごく若い頃、私は、チェホフがそうだと書いたように、すらすらと書けたが、年を取るにつれて徐々にすらすらと書けなくなった。書いて書き直してまた書かなければならず、それ以上よくは書けないので、結局原稿をそのまま残しておくしかなかった。でも、そういう苦労にもかかわらず、書くのが楽しかった。テーブルに着いて、昼食を知らせるどらが鳴ってその日の仕事を終えなければならなくなるまで、ペンから次々と言葉が出てくる時ほど楽しくて気が休まったことはない。時間が過ぎて、私はもう1冊書いて、その後はもう書かないと決めた。その1冊はエッセーの寄せ集めになる予定で、『視点』(*Points of View*, 1958)と名付けるつもりだった。毎年出版される何千もの本が忘れ去られるように、そういう本が忘れ去られることはよく分かっていた。それでも構わなかった。書くのが楽しかった。校正を終えると、私はほっと一息ついた。快い解放感を感じた。だが、悲しいかな、習慣の力とは大変なもので、私はすぐにライティング・テーブルでの楽しい朝が恋しくなり、やがて言いたかったが言い残したことがたくさんあることを思い出した——例えば、書いたものの文脈にそぐわないので破棄したページ、我

が家に泊まっている人たちを楽しませるために語った物語、話す機会のなかった自伝のくだり、知り合いだった人たちの人となり、あれこれと理由があって言わないでおいた方がいいと思っていた考えである。書くことはたくさんあるし、書けば楽しいだろうと思えた。私はまた仕事を始めた。

私は死にかけている。こう言ったからといって、明日とか明後日、来週、来月とか来年死ぬことを予期しているということではない。私に分かっているのは、これから言うような場合にそうなるかもしれないということだ。この年になると、風邪から肺炎になるかもしれないし、運動が心臓発作を引き起こすかもしれないし、車と正面衝突して即死するかもしれないのだ。何年前か前、私は偶然、保険会社用に作られた統計表を見たのだが、そこには一部の年齢の確実な生存年数の統計表が載っていた。当時、私は80歳で、あと5年9か月生きられそうだとことを知った。これを書いている時点で、5年3か月が過ぎてしまったから、事故に遭うのを除けば、私が期待できるのはあと6か月なのだ。普通、臨終は遅々として退屈なものだ。体は機械であり、蒸気機関、自動車や芝刈り機にガタがくるのと同じように自然にガタがくるのだ。私は多くの老人がゆっくりと崩壊していくのを観察する機会があり、多くの場合、その兆候は似たり寄ったりだという事実に関心を打たれた。耳が聞こえにくくなり、みんながぼそぼそ話すといってぐちをこぼす。足がふらついて、杖を使って歩く方が具合よくなる。真昼間、本を読んでいる時、あるいは夕食の後、葉巻をふかしている間、うとうとして眠り込む。30年前に起こったことは、しばしば長たらくして退屈だが、細部にわたって思い出せるのに、先々週起きた出来事は忘れてしまう。記憶力が仕掛ける最悪のいたずらは、使いたい言葉は分かっているのに、どうしても思い出せないことだ。セックスはもはや何の意味もなく、そのことを、自分の性分に従って、損失と見なしでも、救いと見なしでもいいのだ。いらいらしがちで、ささいな理由であっても、かっとなって我を忘れる。老人が我慢しなければならぬ感情はほかにもあるかもしれないが、差し当たり思いつかない。私は超高齢者について気づいたことを述べて観察の結果を強調してきたが、多少にこりともせず面白がっていてもなかったのは、自分も対象であることが分かっているからだ。私の年でもっと長生きできると思うのは馬鹿げたことだろう。死ぬのは怖くない。簡単に言っているが——本当だ。だが、死が差し迫っていたらどう感じるかは分からない。たまに疲れ切って、今眠りに落ちて二度と目がさめなかったらどんな面白いことになるだろうとつぶやくほどひどく疲れて寝る時のように感じるだろうと思いたい。私は、自分の死に際して処理されるいろいろな物事に関して手配してあることを考えるのが好きだ。私は蔵書が自分の決めた方法で処分されるのを見るのが待ち遠しいし、私が50年かけて集めた絵画やオブジェが競売に付される時のサザビーズでの情景を思い描いている。人がたくさん集まらなくて、出した物が大した額で売れなかったらがっかりするだろう。私が死んだ時、愛着があったり義理がある人たちがどうすべきか、どう振る舞うべきか話し合いたい。旅に出ようとでもしているかのように、平静に提案、説明して、助言できるだろう。だが、私はその人たちが死のことは言うまいという固い決意を見せるので思い留まっているのだ。その決意たるや、まるで、決して口に出さないこと、頭から消し去ること、自分たちは逃れられるから関係ないかのように扱うことによっているのだ。奇妙なことは、私が思うに、私たちは死ぬことは分かっているが、傘を持たずに外に出たら濡れるのと同じくらい強く確信していないことだ。

私は遺言書で、死んだら遺体は火葬にすることと追悼式は必要ない旨を指示してある。追悼式は現代の慣習の中でも忌むべき式典だ。故人が地位の高い人だとか抜きんでて国のためになった人だというのなら大変結構なことではあった。当時は、それにふさわしい人に対するしかるべき尊重と尊敬のしるしであった。だが、今や、追悼式は生涯が世に知られていない人や活動が取るに足りない人のために催されるものだから、その人が交わった小さな範囲の中だけでしか重要なものではなくなってきた。あとに残された人は、式を執り行うことになっている牧師とかかる金額について打ち合わせるのだ。参列を乞う手紙が友人や知人に出される。記者が教会のドアのところに座り、参列者たちが入って来ると名前を書き取る。翌日その名前が印刷されるべく「タイムズ」紙のスペースが買われていて、今日我々の世界を支配している知られたいという熱い思いがそんなだから、何らかの理由で——ロンドンにいなかったとか、もっと大事な約束があったとか、単に無関心だったとか——参列しなかった人たちは、それにもかかわらず、自分の名前が省かれないように注意するのだ。教会が混み合ったり、招待客を運んできた車で通りがふさがれたりすれば、式は成功だったと思われるだろう。実際のところ、ちょうどカクテルパーティーと同じくらい頻繁にある社交行事なのだ。カクテルパーティーよりずっと安く済んで、もっと世間の注目を得られる。式に続く昼食会には独特の味わいがある。出席者たちはまだ生きているので、辛口のマティーニをちびちび飲みながら、ある種の満足感を感じずにはいられない。

19世紀の70年代末期と80年代初期、トルビルは、ドービルと違い、海辺のリゾート地で、パリの上流社会は7月14日を過ぎるとそこに引っ込んで、田舎の邸宅に向けて出発する夏の終わりまで留まった。ドービルは家族向きの海辺だった。私の父は、妻と息子たちが海風によっていいことがあるようにと家を借りるのが常で、土曜日の列車で合流して日曜日の夜パリに戻って行った。私はまだ小さくて、乳母に世話をしてもらっていた。母は海辺のキャンプスツールに座って刺繍に忙しくしながら、知り合いになった夏だけ来るほかの人たちとおしゃべりをしている間も、大きい子供3人、私の兄たちから目を離さなかった。海水浴は当時の習慣にはなくて、子供たちは波打ち際で水遊びすることだけが許されていた。若いと言うにはほど遠くみすぼらしいなりをした小柄な絵描きがいたが、よく海辺をほっつき回って、当時流行の服を着たスマートなご婦人方を小さなパネル画（板に描いた絵）にして1枚5フランで売っていたものだ。随分少額に思えるが、当時は5フランでまかない付き下宿に1日泊まれたし、景気がよければ、冬の間、誰も買いたがらない風景画や海の絵を描くのに十分な金になった。夏になると、その絵描きは大部分の時間を人々がもっと豪華に着飾って金を節約しないトルビルで過ごした。でも、時々、気分を変えるためにだけかもしれないが、ドービルにやって来た。彼は見込める客を探そうと、一緒に座ってうわさ話をしている一団を見ると、近寄って行って興味を引くようなパネル画を1枚見せるのだった。彼がよく売れたとは思えない。トルビルよりもむしろドービルで夏を過ごすような人たちは金を無駄遣いする習慣がないからだ。ご婦人方は絵を見てほほえみ、素敵だと思うが、めったに買おうとは思わない。私の母は1つ買いたくなかったかもしれないが、父が好まないのを知っていたから我慢したと思いたい。確かに、それがパリのアパートの客間を飾っているギュスターヴ・ドレ（1832～1883、フランスの彫刻家）の彫刻と一緒に置かれていたら、実に奇妙に思えたことだろう。結局のところ、5フランは5フランなのだ。さほど前ではないが、私がニューヨークでそういう小さな絵の1つを見ていたら、画商に7,000ドル要求された。その画家は、もちろん、ウジェーヌ・ブーダン（1824～1898、

フランスの画家) だった。



私の母は美しい女性だったが、ある日、大きい方の2人の息子と遊歩道を歩いていると、美しい女性がこちらに向かって来るのが見えた。すれ違う時、女性がよくやるように、二人はお互いを上から下まで見た。「あの女性は誰なの、ママ？」と息子の1人が尋ねた。「大した人じゃないわ」と母が言った。「ラングトリー夫人(1853~1929、イギリスの女優で、後にエドワード7世となった王子の情婦)よ」その頃、子供たちはめったに両親と会っていなかった。パリで、私はフランス人の乳母と寝室が一緒に、隣の部屋が子供部屋だった。乳母は午前と午後に私を外に連れて行って来て、私たちが住んでいたダントン通りにごく近いシャンゼリゼでフランス人の小さい子供たちと遊ばせてくれた。私は母が朝の入浴を終えてベッドで休んでいる時に数分だけ母の寝室に入ることを許されていたのだが、たまに母が友人をお茶に呼んだ時、私を見せびらかすために呼ばれ、暗記していたラ・フォンテーヌ(1621~1695、フランス人の作家で、イソップの寓話を集めて出版した)の寓話を暗唱した。私は父のことをよく知らなかった。私の7歳の誕生日に、母のごく親しい友人のアングルシー夫人が20フラン硬貨を1枚くれて、それでどうしたいか尋ねられた。私はサラ・ベルナール(1844~1923、フランスの舞台女優)を観に行きたいと言った。どうしてそんなことを思いついたのか、想像もできない。とにかく、その夜、一番上の兄が生まれて初めて劇場に連れて行って来てくれた。その芝居はひどいメロドラマだったが、私にとっては素晴らしく感動的だった。

アングルシー夫人はアメリカ人だった。夫人は大西洋を横断する旅に出ることで随分ひどい目に遭ったので、合衆国には戻らないつもりだった。イギリスでキンバリー卿の弟と結婚し、夫が亡くなると当時のアングルシー卿と結婚した。その結婚はうまくいかなかったのだが、どのようにして終わったのか説明しようと思う。古い話だが、忘れてはいけないと思う。ウィーダ(1839~1908、イギリスの女性作家)なら面白いことだろう。ある晩、アングルシー夫妻はパーティーを開いていて、ロシア大使が主賓になる予定だった。客たちが到着し、アングルシー夫人が迎えていたが、アングルシーは現れなかった。アングルシー夫人は、夫はまだ着替え中なんだと思い、大使に詫言った。みんなは待ったが、それでも彼は来なかった。とうとう、夫人は客たちが集まったことを知らせるために従僕を夫の部屋へ遣わした。従僕が戻って来て、閣下はお部屋にいらっしやいませんと言って、針刺しにピンで留めてあったのを見つけた夫人宛ての手紙を渡した。手紙の中で、夫は永久に夫人と別れるつもりであり、(名前は忘れたが)だれそれ夫人とイギリスに向けて出発したことを告げていた。晚餐がどのように進んだか、私

は知らない。ぞっとするようなものだったに違いない。客がみんな帰ってしまっただけになると、母は一晚中強がりやを言っていたアングルシー夫人を慰めようとした。「彼はあなたのところに帰って来るわよ」と母は言った。「だって、だれそれ夫人て本当に不器量なんですよもの」アングルシー夫人ははっと息を飲んだ。「その人が不器量なら、主人は絶対帰って来ないわ」夫人は正しかった。アングルシー卿は残りの人生をそのフランス人の愛人と一緒のままだった。

何年も後になってパリにいた時、私はパーティーでアングルシー夫人に会った。その時には夫人も老人であったし、私も 30 歳をかなり超えていた。夫人は私の母のことが大好きだったので、その母のことを私に話してくれた。私の母は、前にも言ったように、とても美しかったのだが、それがどんなに美しかったかをアングルシー夫人は私に語ってくれた。ある日、夫人は母に言った。「あなたはそんなに美しく、素敵な青年たちがみんなあなたに夢中なのに、一体どうして不器量で小柄な夫に貞節でいられるの？」と母は笑って答えた。「あら、だって、結婚してから一度も夫に気分を害されたことがないからよ」

私の母は肺病質で、姉も肺の病気で亡くなっていた。当時、医者たちは、そういう病気に冒された女性にとっては子供を産むことが有効だという説を支持していた。そういう訳で、すぐ上の兄が生まれてから 6 年で私は生まれた。パリで一冬過ごして、私がもうすぐ 7 歳になる頃、それが母に効果があったので、医者たちはさらにもう 1 人子供を産むべきだと判断した。死産で母も亡くなった。父も 2 年後に亡くなって、私は乳母にイギリスに連れて行かれ、ホイットスタブルの教区牧師で後見人である叔父に引き渡された。私は乳母が大好きだったから、乳母がすぐに追い返されると、つらくて涙を流した。

イギリスでの最初の日曜日、私は朝の礼拝のために叔父とその妻である叔母について教会に行った。何回か母にイギリス大使館の反対側のアゲソー通りにあるイギリス教会に連れて行かれたことはあったが、母はほかのご婦人方のようにお説教の前にそっと外に出たものだったから、叔父が説教壇に上がって話し始めたのを見て驚いた。礼拝がやっと終わると、私たちは馬車で牧師館に戻って夕食を食べた。テーブルの上が片づけられた後、私をテーブルの端の椅子に座らせると、叔父は祈祷書のしかるべきページを開いてそれを私の前に置き、その日の祈祷文を暗記するようと言うのだった。「お茶の時間に、お前がそれを暗唱するのを聞くからな」と叔父は言った。「ちゃんと言えたら、ケーキを 1 切れやろう」その後、叔父は書斎に入って行って、朝のお勤めの骨休めをし、叔母は客間に横になりに行った。私は独りで残された。1 時間かそこらすると、叔母は庭に入って行って散歩し、食堂を通り過ぎる時に覗き込んで私がどうしているか確かめるのだった。私は両手に顔を埋めて号泣していた。叔母は慌てて食堂に入って来て、どうしたのかと尋ねた。なおのこと泣いて、私は涙にむせんだ。「僕、分からないよ。一言も。何言ってるのか分からないよ」「まあ、ウィリー、叔父さんはあなたを泣かせたかった訳じゃないのよ。あなたに祈祷文を覚えてほしかったのは、あなた自身のためなのよ。泣かないでちょうだい」叔母が私から祈祷書を取って行ってしまっただけで、私はまた独り残されると、胸がはりさけんばかりに泣いた。テーブルにお茶の用意ができた時、叔父は私に話しかけなかった。叔父がすごく怒っているのが分かった。祈祷文を暗記するには私が幼すぎると叔母が叔父を説得してくれたに違いないと思った。とにかく、二度とそうするように言われたことはなかった。



小学校での3年の後、私は小さな黒いガウンを着る特権をもらえる奨学金でキングズ・スクールに移った。私が15歳の時、秋学期の間に肋膜炎のひどい発作を起こしたが、回復に向かうと、私の病歴から見て、残りの冬を学校で過ごすのは賢明でないということになり、自分の健康のためにリビエラのフランス側にあるイエールに落ち着いて、何らかの病気から回復しつつある数人の少年たちを受け入れているイギリス人家庭教師の元に行かされた。私は夏学期が始まるまで学校に戻らなかった。私がいなくても5年生に進級させられていた。先生はゴードンという名のスコットランド人だった。私は学年の末席に置かれていて、学期の初日にある一節を訳すよう言われた。そのラテン語は簡単だったので、英語にどう訳せばいいかよく分かったいたが、私は恥ずかしくて緊張していた。どもり始めた。少年たちの1人がクスクス笑い出すと、もう1人が、さらに3人目がと、1,2分の内にクラス中がはやしたて、大声を上げて笑い転げた。私は気づかないふりをしていたが、興奮してどもり続けた。とうとう先生は着いていたテーブルを握り拳で叩くと、大騒ぎの中でも聞こえるように叫んで怒鳴った。「座れ、馬鹿者。どうしてお前がこの学年に入れられたのか分からん」私は座った。ぼう然としてはいたが——長い間ではなかった。私は腹を立てていた。その人を殺していたかもしれない。私は無力で何もできなかったが、即座にもう1学期を絶対にあの人でなしの先生とは過ごすまいと心に決めた。どうすべきかはちゃんと分かっていた。私は年の割に小柄で虚弱だったが、狡猾だった。私が病弱なことを考えれば、もう一冬を寒くて湿気のあるカンタベリーで過ごすリスクを取るよりも、次の冬はまたイエールの家庭教師と過ごした方が安全だと言って叔父を説得するのに何の支障もなく、この屈辱的な学期の終わりには永久にキングズ・スクールを去るという満足のいく結果を得た。

南フランスでの二度目の冬の後、私はイギリスに、叔父の牧師館に戻った。牧師館は、聖職者が後の時代にはできなくなった豪勢な暮らしをしていた時に建てられたものだった。町からかなり離れた所にあつて、教会からは1マイル以上あつた。大きな庭があり、食堂の窓から十分の一税（教会および聖職者の生活維持のため物納された）として牧師に納められた緑の野原が望めた。正面玄関、横からの入り口と裏口があつた。正面玄関は重要人物だけが使い、新任の副牧師が呼び鈴を鳴らすと、立場をわきまえていないと思われた。馬小屋と馬車小屋があつた。庭師が週1ポンドで鶏の世話をし、冬はストーブが家を暖かく保つよう計らってくれた。メイドが2人いたが、それぞれ年12ポンドもらっていて、クリスマスには新しいプリント生地ドレスをもらう権利があつた。叔父は、毎朝昼食前に養殖場まで歩いて行き、牡蠣を12個、1シリング払って食べるのが習慣だった。毎日曜日、朝の礼拝のために「熊と鍵」から借りたランドー馬車（幌が前後に別々に開き座席が前後に2つある4輪馬車）が教会に連れて行ってくれたが、叔父と私は、天気がいいと、夕方の礼拝には教会まで歩いて行った。日曜日は小説を読むのを許されていなかったのだから、私にとってはつらい日だった。叔父は7、8月にロンドンからホイットスタブルにやって来る休日の行楽客が好きでなく、妻と鉱泉水を飲み、エムスやバーデンバーデンとかホンブルク（いずれもドイツの地名）に行っている間は、自分のところに副牧師と一緒にそういう好ましくない行楽客の魂の相手ができる代理牧師を置くことにしていた。叔母はドイツ人、フロイライン（ミス）・フォン（貴族の名前に使用し、「出身」の意）・シャイトリンだったが、どうしてイギリス人の教区牧師と結婚することになったのか、想像もできない。叔母は持参金として、寄せ木細工のロールトップデスク（巻き込み式のふたが付いた机）、ニンフェンブルクの磁器をいくつかと、一族の紋章が16彫つてある金縁のタンブラーを4つ持って来た。非常につましくて控え目な女性で、ちょっとした買い物をする以外はめったに出掛けなかった。叔母には信条があつた。ある時、裕福な銀行家が夏用に牧師館から遠くない家を借りた。叔父は副牧師協会への寄付をもらうために訪ねて行ったが、叔母はその人が銀行家として商売をしているからといって妻を家に呼ばなかった。

私は学校をやめてしまうと何もすることがなく、叔母の提案だったかもしれないが、ドイツに行ってドイツ語を習うつもりだった。叔父は私がいなくなっても残念に思わないので賛成してくれ、叔母はミュンヘンの親類に手紙を書いて、私が一緒に住んでもいい家族を推薦してもらえないかと頼んでくれた。グラバウの生まれの貴族で、ハイデルベルクで教授と結婚して小さな賄い付き下宿屋を営んでいる女性に心当たりがあるという返事がきた。その下宿は評判がよく、その女性の夫である教授にドイツ語のレッスンをしてもらうことができた。叔母はその女性に手紙を書いてシャイトリン生まれのフォン・ソフィー・モームとサインし、私を歓迎するという返事を受け取ると、私の到着の日が決められた。ドイツで1、2年過ごすことが私にとっていいことがあるとどうして叔父が思ったのか不思議だった。私にはほんの少ししか、年150ポンドしかなかったのだから、いずれ生活費を稼ぎ始めなければならなくなるはずだった。私は度々医者にかかっていたし、一度は専門医の検査を受けるためにロンドンまで連れていかれたことをぼんやり記憶している。恐らく、私は大人になるまで生きられそうにもないから、何をしようと、どこでだろうが大した問題ではないと叔父は考えたということなのだろう。

教授夫人の家族には娘2人と私より1、2歳若い息子がいた。そして、下宿人は、私が初めて下宿に行った時点では、大学で学んでいるフランス人、中国人、ハーバード大学でギリシャ語を教える研究を続けるためにドイツに来た背が高く、ひょろ長いニューイングランド（アメリカ）出身の人だった。

英語を話すのは彼と私だけだったから、お互いに話しかけるようになって、しばらくすると彼が私に森の遊歩道を案内してほしいかと尋ねたのも当然だった。彼は私を荒れ果てた城（ハイデルベルク城かと思われる）に連れて行き、そこでお茶を飲んだのだが、彼が払うと言ってきかなかった。それからネッカー川流域がよく見える「王の広間」に連れて行ってくれた。彼に私自身のことを聞かれ、話すようなことはほんの少ししかないと言うと、すぐに彼はギリシャ語を教えようと申し出てくれた。私が断ると、彼はぜひにもと言ったが、同意するにはあまりにも学校の記憶から時間が経っていなかった。何週間か経って、彼は2週間の休みの間スイスに行くつもりだと言って、私に客として一緒に来ないかと誘ってくれた。もちろん嬉しくて、叔父に行く許可をもらって出発した。その小旅行のことは何も覚えていないが、ハイデルベルクに戻るとすぐ、彼はベルリンに向かった。彼の部屋は、ケンブリッジから出て来るとすぐロンドンで1年を勝手気ままに過ごし、教養を求めてドイツにやって来たエリンガム・ブルックスという名前のイギリス人が借りた。私たちは一緒に遠くまで散歩に行き、彼は私にカーディナル（枢機卿）・ニューマン（1801～1890、イギリスの高位聖職者・神学者）、ジョージ・メレディス（1828～1909、イギリスの小説家）、『想像の肖像』のペイター（1839～94、イギリスの批評家・随筆家・小説家）、スウィンバーン（1837～1909、イギリスの詩人）やウマル・ハイヤーム（1048～1131、ペルシアの学者・詩人）のことを話してくれた。当時は本が高かったし、タイプライターの時代より前のことだったからだと思うが、彼はフィッツジェラルド（1809～83、イギリスの詩人・翻訳家）が訳したハイヤームの4行連句（通例 abab と押韻する）を手書きですっかり書き写していて、よくその一節を読んでくれた。私はわくわくした。数週間後、彼はフィレンツェへと流れて行った。それから大して時間をおかずに、この2人が労を惜しまずに私の興味を引き続けてくれたのは、私がうっとりして彼らの話を聞いたからでも、彼らに孤独で無知な16歳の少年に対する親切心があったからでもなく、彼らの性的欲望のためだったということが分かり始めた。私が無知だった（パブリックスクールでの3年後だ!）から、彼らが私と付き合うこと以上のものを求めようとは思いつかなかったのだ。もし彼らが私に言い寄っていたら、私が全く分かっていなかったのも、彼らはすっかりまごついたに違いない。

アメリカ人の方とは二度と会うことはなかったが、後に、私が医学生だった時、ブルックスが再び私の人生に入り込んできた。彼は最終的にカプリに落ち着いて、高齢になるまで生きた。彼は長い人生の間、一日たりとも働かなかった。つまらない人間だったかもしれないが、彼には恩義がある。彼は本当に文学を愛していて、その美しさに私の心を開かせてくれた。私は非常に多くの小説を読んだが、それは独りぼっちで何もすることがなかったからだ。彼の影響で、彼がいなければ知ることもない本を読むようになり、間違いだらけの人生の中で必ず慰めてくれるものが得られた。実を言うと、年が経つにつれて、私は彼が称賛していた作家の何人かは興味をなくしてしまった。もはや、スウィンバーン、ウォルター・ペイターとかメレディスは読まないが、フィッツジェラルドの4行連句は今でも楽しく読んでいる。

私は時々退屈しのぎに、あの先生があのようにひどくなくて学校に残っていたら、私の人生はどうなっていたらと考えたことがある。期末試験が終わると、私は学年のびりだったのがトップから6,7番以内に入っていて、あと1学期終えれば6年生に進級していたはずだ。そうなれば、奨学金で、兄たちがそうしたように、私もやがてケンブリッジに行っていたはずだ。私がフェローシップ（特別研究員）に選出されて、そうなれば、どもりのせいで指導教員や講師としては大して役に立たなかったら

うが、ブラッドリー（1846～1924、イギリスの哲学者）のように大学の部屋に隠遁して残りの人生を過ごしたかもしれない、というのはちょっとあり得そうなことだ。私は『外観と現実』（*Appearance and Reality*, 1893）のような素晴らしく興味をそそる作品を書くことは望むべくもなかったが、目立たない間隔でフランス文学に関する退屈な学術書をたくさん世に出して、やがて平凡な人生を行儀よく終わらせていたかもしれない。

私がドイツからイギリスに戻ると、叔父は官庁で抜きん出ているオックスフォード時代の友人に手紙を書いて、私が入るチャンスがあるかどうか尋ねた。その友人は返事を寄こして、自由党政権が官庁の部局にとんでもない変更をもたらして、今や全く違う階級の人間が入っている、唯一言えるのは、結果的に官庁は紳士向きの場所ではないということだ、と言ってきた。それはその通りだった。次に叔父は、私の祖父のところの（法律家になるための）実務修習生だったディクソンという名前の事務弁護士に手紙を書いた。私の祖父ロバート・モームは法律家で、『英国人名事典』（イギリスの歴史上著名な人物の人物録）で長文をさかれるほど著名だった。祖父はエッセイ集を書いてジョージ3世の評判のよろしくない息子の1人であるサセックス公爵に献呈したくらいだから教養人だったに違いないが、公爵はきっとそれを読まなかっただろう。私はその第2版を持っている。祖父の家は大家族で、当時はそれが普通だったが、娘が3人と息子が4人いた。その中で、叔父が一番下で、幼い頃から聖職者になるよう決められていた。そのために、クリスマスの時にほかの子供たちがパーティーに出掛けて行っても、叔父は将来の聖職者として家に残された。そのせいで、叔父は死ぬまで不機嫌になったのだと思う。

何回か手紙のやりとりがあって、私はロンドンに行つてディクソン氏に会った。彼は私を昼食に連れ出してくれた。彼がしてくれた話は私の気持ちをくすぐった。祖父がある日曜日、教会での礼拝が終わってから家族と一緒に食事しないかと若きディクソンを、というのは当時は彼も若かったからだが、誘った。上座の祖父がローストビーフを切ると、祖父の前に皮ごと焼いたジャガイモが1皿置かれた。祖父は1つずつ拾っては壁の絵をめがけて投げつけた。誰も一言も発しなかった。どうやら祖父は気骨のある人だったらしい。ディクソン氏は、私が数週間チャンスリー・レーンにある会計士事務所で過ごして仕事が合うかどうか確かめるよう手配したと言った。そうはならず、来る日も来る日も計算につぐ計算の毎日を1か月かそこら過ごした後、私はホイットスタブルに戻った。叔父は私を見てちっとも喜ばなかった。私のことを無能で（その通りだが）怠惰（そうではないが）だと思ったのだ。最終的に私に救いの手を差し伸べてくれたのは地元の医者だった。彼は医者を選ぶのも悪くないかもしれないと提案してくれた。その考えに私が喜んだのは、主としてぜひ住みたかったロンドンに住めるからだったが、それ故、必要な試験に通るために受験対策教師のところ数週間過ごした後、18歳で医学生としてセント・トーマス病院に入った。



カリキュラムの一部としてオックスフォードとかケンブリッジで2年過ごしてきて、大学に行っていない私たちより一段上だと自任する人たち以外はみんなその辺の年齢だった。私はよく学友たちの性的体験の自慢話を聞くと、単純にそれを信じて、自分がまだ童貞なのを恥ずかしく思った。ある土曜日の夜、私はピカデリーに行って、1ポンドで一晩一緒に過ごしてくれる女を拾った。その結果、淋病にかかり、恐る恐る病院に住み込んでいる研修内科医にどうすればいいか聞かなければならなかった。しかしながら、この災難にくじけることなく、金に余裕のある時はそれを続けていたが、幸いぶざまな結果になることもなく、そうやって性的本能を満たしていた。5年間を終えて、私は資格を取ったが、『ランベスのライザ』(*Liza of Lambeth*, 1897) という小説を発表したばかりで、それが問題作として評判になったので、医学をやめて作家として生計を立てていこうと決めた。私はスペインに行き、そこで1年の一番いい時期を過ごした。イギリスに戻るとすぐに、私は友人と一緒にヴィクトリア駅の近くに小さなフラットを借りて家具を用意した。ウォルター・ペインという名前でも、ドイツで初めて知り合ったのだが、私は腰を落ち着けて執筆に取り掛かった。ウォルターは公認会計士で昼間はずっと留守だったから、私は独りでフラットを使った。彼は非常にハンサムで一緒に寝る女を捕まえるのに何の苦労もなかった。用済みになると私に回してくれた。それはちょい役の女優とか、女店員とか会社の事務員だった。週に一晩くらい、ウォルターは出掛けることになっていて、その時私が親しくしている女が来て一緒に食事をし、その後二人でセックスにふけたものだ。夜遅く、服を着て下に降りて行き、その女を辻馬車に押し込んで料金を払い、翌週の約束をするのだった。そこにはロマンスも愛もなく、欲望だけがあった。振り返ってみると、この経験はひどくあさましいように思えるが、結局のところ、私は20代の初めで、性的な傾向を表出する必要があったのだ。

私は着実に仕事をした。2,3の小説と短編集を1巻出版した。戯曲もたくさん書いたが、受け入れてくれる興行主はいなかった。小説の1つ、『クラドック夫人』(*Mrs. Craddock*, 1902)はそれなりに成功し、数年前に書いた『名誉を重んじる男』(*A Man of Honour*, 1903 初演)という戯曲は舞台協会(Stage Society)で上演された。文壇に友人を作って、将来有望な若手作家と見なされ始めた。文学に通じたご婦人方がパーティーに招いてくれた。ウィルバーフォース夫人は夫がウェストミンスター寺院の大執事で、私のフラットの女主人が喜んだことに、『ランベスのライザ』について説教をしていたが、上流社会の人たちとたくさん知り合いになった。みんな私を気に入ってくれた。昼食会や夕食会に呼ばれた。ダンスパーティーに行き、別荘で週末を過ごした。あれ以来、どうしてこの金持ちで俗物の人たちが私に気を遣ってくれるのだろうと不思議に思うことがたびたびあった。私から提供できるものはほとんど何もなかった。私は貧乏で内気でどもりだし、彼らが話題にするようなことは何も知らなかった。何年も、何年も後になって、私が若かった頃のパーティーの女主人に、その人やほかの人たちは私のどこがよくてあんなに親切にしてくれたのかと尋ねた。「あなたはほかの青年とは違っていたわ」と彼女は言った。「物静かでおとなしかったけど、絶え間なく持続する活力のようなものがあって、それが興味をそそったの」私は社交生活を楽しんでいて、いつまでもその生活を続けていたところだったが、そんなことをしていても何にもならないと悟らざるを得なかった。私は30歳になっていた。マンネリになっていて、脱け出さなければいけないと思った。そのことについてウォルター・ペインと話し合い、その結果、二人でシェアしていたフラットを出て、持っていたわずかな家具を二束三文で売り、私はわくわくする気持ちでパリへ行った。そこで、私は何年も後に王立美術院(Royal Academy)の院長になるジェラルド・ケリー(1879~1972、イギリスの画家)と旧交を温め、彼を通じて芸術を愛する人たちの、私にとっては新しい世界へ入った。そこで送った気楽なボヘミアン生活のことはほかのところで語ってきたから、ここで述べる必要はないだろう。私はカプリで夏を過ごし、パリに戻ってもう2,3か月いた後、ロンドンに帰った。ウォルターは私よりずっと楽な暮らしをしていて、パルマル街に部屋を借りていたので、私も彼の隣の部屋を借りることができた。私は『魔術師』(*The Magician*, 1908)という小説を書いたが、それはパリで過ごした何か月かの間にたびたび会ったおかしな男を基にしたものだ。あれは大したことのない小説だった。

私は相変わらず非常に貧しかった。だが、当時は生活費が安かったので何とかやっていけた。私がパリに行く前にできたたくさんの友人の中に、「レディスマスの包囲」(第2次ボア戦争で、レディスマスに撤退したイギリス軍をボア軍が118日間包囲し、イギリス軍の兵士3,000人が死んだ)で亡くなった『デイリー・メール』特派員の未亡人ステーブンス夫人がいた。彼女は当時の文学界と演劇界の人間をすべて知っていた。ネルソン提督(1758~1805、イギリスの海将)が愛人のエマ・ハミルトン(1765?~1815、イギリスの絵画モデル・舞踏家)と住んでいたマートン・アビーと呼ばれる家を持っており、夏の間中午後のパーティーを開いて友人たちを招くのが常だった。その中の1つで、私は若い美人に出会った。薄い金髪と青い目をしていて、血色のよさと豊満さにやや欠けることを除けば、ルノワール(1841~1919、フランスの画家)の官能的な裸体画を思わせた。美しい体をしていて、一番の魅力はその笑顔だった。人に対して、私がそれまでに見た中で最も美しい笑顔をした。その出会いの後、私は何度も彼女と会った。彼女は女優ということになっていて、結婚はしていたが、幸せではなかった。ある晩、レストランで一緒に食事をした後、私は彼女をパルマル街の独り身の部屋に連れて帰った。私

は彼女の愛人になった。辻馬車に乗って彼女が住んでいるところに帰る途中、この関係はいつまで続くかしらと彼女に聞かれた。「6週間」と私は軽く答えた。それが8年続いた。彼女をロージーと呼ぶことにしよう。

長い人生を振り返る時、私に起こったことのほとんどすべてが偶然 (chance) によって引き起こされたような気がする。私は好奇心からこの言葉 (chance) をオックスフォード英語辞典で調べてみたことがある。数ある定義の中に、「起こる、または生ずる事柄；偶然の出来事または事件；しばしば、不幸な出来事、災難、不運」と書かれているものがあつた。この「しばしば」という言葉は、私が思うに、悲観的過ぎる。私の記憶では、この偶然の出来事は、大変な不幸をもたらすこともあるが、それよりもしばしば私のためになってきたのだ。

私の全短編小説の中で、『雨』(Rain, 1921) は最も広く知られたものだ。私はタヒチで降ろしてくれる船に乗るつもりでホノルルに行っていた。そこに行きたかったのは、ずっとゴーギャン(1848~1903、フランスの画家)の生涯を基にした小説を書こうと思っていたからだが、彼のことはパリで過ごした1905年に散々聞いていたし、タヒチで役に立ちそうな事柄を見つけたかったのだ。なぜか忘れてしまったが、そこへ行く船がなく、ニュージーランドに行く途中ホノルルに寄港してパゴパゴ(アメリカ領サモアの首都)で乗客を降ろす船を待つしかなかった。そういうスクーター(縦帆式帆船)を捕まえて乗ることができた。待っていた船がホノルルに着くと、私は乗船の予約をした。その前の晩、世間が騒いでいたのだが、イウエレイというホノルルの赤線地区が警察の手入れを受けていた。私の乗った船が出港する2,3分前に、若い女が慌てて乗船してきた。後になって知ったのだが、彼女は司直の手から逃げている売春婦だった。ほかの乗客は、医者とその妻、宣教師とその妻だった。パゴパゴに着くと、カナカ族(ミクロネシア、マーシャル諸島、パラオ等の島々の住民を一般的に呼ぶ俗称)の間ではしばしば死に至る病であるはしかが流行っていることを知ったのだが、アピア(西サモアの首都)からの電信指示が受信されていて、乗組員が誰も感染していないことが確実になるまで、スクーターも、私たち——宣教師夫妻、医者とその妻、私——もアピア入港を許可されないということだった。私たちは追って通知があるまでパゴパゴに留まらなければならなかった。その足留めのお陰で、私が触れた小説を書く機会を得た。その機会は全く偶然に与えられたのだった。

ある時、私はたまたまシンガポールにいたのだが、友人の弁護士とその妻から一緒に食事しないかと誘われた。私が着くと、女主人が私に言った。「あるご夫婦を食事に来るよう誘ってあるの。あなたはあまりお好きじゃないでしょうけど、誘わない訳にはいなくて。そのご夫婦はボルネオ島に向けて出港する予定だったんだけど、船が遅れて明日の朝まで出ないものだから、何もすることがないし、ここには知り合いもいないしという訳で、私たちが誘わなきゃって思ったのよ」続いて、主人の方が来る予定の客のことを話してくれた。夫の方はボルネオ島のある地区を担当している駐在事務官だった。非常に有能だが、大酒飲みだった。毎晩ウイスキーのボトルを1本ベッドに持って行き、朝までには空にするのが習慣だった。とうとう、そのことが世間の物議をかもすまでになり、総督が彼を呼んで、酒をやめなければ首にせざるを得なくなると告げた。その男は仕事がよくできたし、総督も思いやりのある人間

で、3か月の休暇を与えるから、イギリスに行って彼にまともな生活を続けさせてくれる妻を迎えたらどうかと提案した。彼はその通りして、今、完全にしらふで、シンガポールを通過して仕事に復帰するところだった。主人たちがちょうど私にこの話をし終わった時に、その客が到着した。彼らは二人ともごく普通の人たちで、私が見たところ、30代半ばで、明らかにいわゆる上流階級ではないが、ちゃんとした中流階級の一員だった。退屈な人たちだった。幸せそうに見えた。妻の方は今まで一度もイギリスを出たことがなかったから、結婚して嬉しかったのだろう。私たちが別れて別々の方向に向かう時、私が興味をそそられるのは、その男が毎晩ウイスキーのボトルを1本ベッドに持って行き、朝までには空にするのが習慣だったということしかないと思った。これを基にして、私は『パーティーの前に』(*Before the Party*, 1922) という小説を書いた。彼らが乗って行く船が2,3時間遅れなかったら、その夫婦に会うことも、関連することをすることもなかったのは明らかだ。私の小説は偶然のお陰だった。

私にできたことは、と言っても、とっさに思いついただけなのだが、もし偶然がそれほど私の文筆活動と深い関係があるとしたら、その偶然について識者が述べていることを確かめるのも悪くないかもしれないので、正にそれを扱っていると思われる C. D. ブロード (1887~1971、イギリスの哲学者) による小冊子『決定論、非決定論と自由意志論』(*Determinism, Indeterminism, and Libertarianism*, 1934) をロンドン図書館から取り寄せることだった。私はそれを読んだが、何のことやらで分からず、もう一度読んで、理解できたと思うが、結論には失望したままだった。だが、私はブロードが著名な哲学者であることは知っていたし、彼の『精神と性質におけるその位置』(*The Mind and Its Place in Nature*, 1925) という本の特に私にとって重要で説得力のある部分を読んだことがあったから、その小さい方の本に不満なのを自分自身の愚かさのせいにして3回目を読んだ。私が理解できる限りでは、その先生が到達した結論は、自由意志というのは一つの可能性としてはあるということだった。だが、私が受けた印象では、彼は心の底では決定論の方が真実らしいと思っているようだった。偶然は引力と同様に説明できないものだと言っても軽率すぎることはないだろう。私たちは皆、物体の引力がその大きさに比例して変化し、物体間の距離の二乗に反比例して変化することを知っているが、私が知る限り、その理由を教えてくれた人間はいない。だが、偶然というものを説明できないのなら、そこに生じたものが偶然の結果だと結論づけることはできない。行動の選択に直面した時、どれか一つを選ぶのは、その人がそういう人間だからだ。そういう人間であるのはその人に原因があるのだろうか？ 仮にたまたまその選択がまずくて後悔したとしても、必ずしもその人がそういう人間でなくなる訳ではないし、また次にその人が同じような選択するのは確かだ。私はこの結論を好まないが、どうやったら逃れることができるのか分からない。

私が人気劇作家になったのもまた偶然だった。私は戯曲をたくさん書いたが、興行主たちは全員揃って拒絶した。そういう時にたまたま、コート・シアターで上演される予定だったある芝居が突然なくなり、興行主のオト・スチュアートが次の作品のために雇っていたキャストはすぐには使えなかった。彼は困った。私の戯曲『フレデリック夫人』(*Lady Frederick*, 1907 初演) が彼の注意を引いたものの、彼の興味は思想劇にあったので、彼の好きなタイプのものではなかったが、劇場を空にするよりも私の戯曲を採用する方を選んだのだ。彼は、6週間で終わるだろうから、その時には次の作品のキャストも暇になるだろうと思った。『フレデリック夫人』は成功だった。1年以上続いた。その成功は私にとって大きな意味があった。職業作家としての10年間、年100ポンド以上稼いだことはなかったし、父が遺

してくれた 3,000 ポンドは徐々に減っていったほとんどなかった。



そうすると、ほかの興行主たちもそれまで拒絶していた戯曲を採用してくれて、私は 2,3 か月の内にロンドンで 4 つ上演させた。そんなことはかつてなかったことで、大評判になった。成功のお陰で、当然のことにすぎないが、新しい友人がたくさんできてもてはやされた。私は存分に楽しんだ。

友人たちの中にアルーセン夫妻がいた。夫妻はストックポージスに大きな家を持っていて、夏中、週末のパーティーを開くことにしていた。パーティーは、貴族、政治家、社交界の花、陸軍の軍人、海軍の軍人、作家という雑多な人たちの楽しい集まりだった。私は常連の客だった。アルーセン夫妻の家で美しいクレメンティン・ホージアと結婚したばかりのウィンストン・チャーチル（1874～1965、イギリスの政治家、1940～1945 首相）に会った。夫妻の家から車ですぐのところゴルフ場があって、ウィンストンと私はよく一緒にプレイしたものだ。私たちはへたくそだった。彼は負けるのが嫌で、私たちは全くの互角だったから、私とプレイするのを喜んだ。ある日曜日の午後、私たちの前に遅い組がいて、彼らがちょうどドライブを打とうという時にそばまで行ってしまった。ウィンストンは彼らに近づいて行った。「私たちに先に打たせていただけませんか？」と彼は頼んだ。「6 時に閣議があって、ロンドンに戻らなければならないもので」その二人の男はイエスと答えるしかなくて、(幸いにも) 私たちは揃ってうまい具合に真っ直ぐなティーショットを打てた。ウィンストンは相変わらずいかめしい顔だったが、目は輝かせて彼らに礼を言って、私たちは歩を進めた。私たちはラウンドを終えてたっぷりとお茶を飲むのにいい時間にアルーセン夫妻の家に戻った。その後、彼は自分の部屋に上がって行き、晩餐会のために着替える時間になるまで休んだ。

晩餐会は素晴らしいイベントだった。ご婦人方は夜会用の礼服とダイヤモンドを身に着け、男どもは——燕尾服、糊の利いたシャツ、高い襟に白の蝶ネクタイだった。誰もが皆、身分に応じて席に着かされていた。次々にご馳走が出てきた——スープ、魚、アントレー、ロースト、セイボリーにフルーツ。その後、ご婦人方は退出して、男どもは残ってタバコを吸ったりポートワインを飲んだりした。しばらく

くすると、主人が客間でご婦人方と合流しようと勧めた。ブリッジをやる者はカードテーブルに座り、ほかの者は世間話をした。真夜中近くになって、女主人がもう遅いのでパーティーはお開きだと言った。ご婦人方は、恐らくだが、床につくのだが、男どもはそれぞれの部屋に上がって行き、燕尾服を脱いでディナージャケットを着ると、喫煙室に集まってパイプタバコや葉巻を吸った。そんなある夜、土曜日の夜だったが、喫煙室に私たちが 10 人ほどいた。その中に海軍士官がいて、ストークポージスを訪ねるのは初めてだった。彼は極めて自信家で、見るからに自分自身を高く評価していた。自分のことをうまく、見事にさえ表現した。たちまち会話を独占した。彼の実に雄弁な話のテーマは忘れたが、その話はウィンストンに著しく影響を及ぼすものだと感じた。ウィンストンはひたすらその青年の話に聞き入り、明らかにその青年が説明している見解に感銘を受けていた。私も聞き入ったが、その青年は単に無意味なだけではなく、危険で無意味なことを言っていると思った。そろそろいいだろうという時になって、私は口をはさんだ。私が一言、ほんの一言言うと、みんながどっと笑った。その一言で、化けの皮をはいだのだった。

私たちはその後早々に別れてそれぞれの部屋に行った。次の朝、私が喫煙室で独り座って日曜紙を読んでいると、ウィンストンが入って来た。彼は真っ直ぐ私に近づいて来て言った。「君と取り決めをしたいんだ」「僕とかい?」「君が僕をだしにして冗談を言わないと約束してくれたら、僕も君をだしにして冗談を言わないと約束するよ」私は自分の耳が信じられなかった。「冗談だろ」と私はほほえんだ。「僕は真面目なんだ」と彼は答えた。「そう約束してほしいんだ」「もちろん、そうするよ」と私は言った。「それならいいんだ」と彼は言って、私が日曜紙を読み続けるのに任せた。私には解せなかった。何しろ、彼は大臣で閣僚だった。当時、議会は重視されていて、閣僚になることは重要な地位を占めることだった。私はいくつかの軽喜劇の作者であって、その軽喜劇は大成功していたが、知識人たちはあまり褒めないどころか酷評した。私たち、ウィンストンと私は違う世界に住んでいて、一体どうして私の言ったことがいささかでも彼にとって重大なことになるのだろうか? もちろん、私は彼の妙な頼みが上述した喫煙室での前夜の話のことなのは分かっていた。唯一私が思いついたのは、彼の考えでは、政治家が対処しなければならない最も危険なことは嘲笑の的になることだから、少なくとも私に関する限り、恐れることは何もないことを確信したかったということだ。

上に述べたことを読んだ方は、一瞬たりとも私がウィンストンを貶めるために述べたとは思わないでいただきたい。そうだとしたら、私の本意からかけ離れている。彼は偉人だ。その点について、ゲーテ（1749～1832、ドイツの詩人・劇作家）のある言葉を引用しよう。「偉人は」彼曰く「より高尚な美德とより大きな欠点を持っていることを除けばほかのみんなと全く同じだ」これを言った時、ゲーテは間違いなく自分自身のことを考えていたのだが、この言はウィンストンにも見事に当てはまるのだ。彼は下院議員になった時点ですでに名士であり、その能力は早々に認められたが、自信と傲慢さのせいで多くの敵ができた。今となっては、彼がどれだけ強烈に嫌われていたか認識するのは難しい。彼が保守党を出て自由党に入った時、それはロイド・ジョージ（1863～1945、イギリスの政治家、1966～1922 首相）の配下に職を得るためだと世間一般には言われていた。彼は恐れられ、疑われ、嫌われていた。

私の戯曲が合衆国で上演され、毎年のようにニューヨークに行ってリハーサルに参加した。ロージーは特に演技がうまい訳ではなかったが、私が地方都市での代役とかちょい役につけてやるには十分だっ

た。彼女はその時には夫と離婚していて、匂わせることすらなかったが、私と結婚したがっているのが分かった。私はそうしたくなかった——私の友人がみんな彼女とベッドを共にしたことがあったからだ。こう言うと、まるで彼女が何だか奔放みたいに聞こえるだろう。そんなことはなかった。彼女に悪意はなかった。たまたま彼女はセックスが好きで、男と一緒に食事をすればセックスを伴うのは当然だと考えていただけのことだった。私も年を重ねつつあった。30代も終わりに近く、もし結婚するつもりならすぐすべきだとふと思った。

私は長年友人のウォルター・ペインと一緒に暮らしていた。『フレデリック夫人』が私に最初の成功をもたらすと、私たちはパルマル街の下宿からマウント・ストリートのアパートに引っ越して、2,3年後、さらに裕福になると、私はチェスタフィールド・ストリートにある一軒家の長期賃借権を買った。あそこは今でこそ売春婦たちに乗っ取られてしまったが、当時は今と違って、メイフェアの中心にあり、静かでもとてもきちんとしていた。それまでに、ウォルターは複数の会社の役員になっていた。彼は優秀な実業家で、私にその能力がないので資産運用面の面倒を見てくれた。だが、私たちの興味はそれぞれ違うものになってしまっていたので、彼は下宿人みたいな形で私の家に住み続けてはいたが、もはや親しくはなかった。私は結局ロージーと結婚するに越したことはないと思い始めた。彼女を愛してはいなかったが、彼女ほど好きな人はいなかった。私は彼女が好きだった。どうして気にする必要があるのだろうか、私は自問した、彼女が大勢の友人とベッドを共にしたからといって？ 私自身だって散々乱れた関係を持っていた。ようやく、私は心を決めた。

私はまた、今にもアメリカに行こうとしていた。ロージーは地方である芝居に出ていたのだが、私は出発する前にやらなければならないことがいろいろあったので、会ってさよならを言うことができなかった。だが、彼女はシカゴで始まる予定の新しい芝居でいい役をもらっていたので、私はそこで合流して結婚を申し込もうと心を決めた。イギリスを発つ前に前に、私は宝石店に行って婚約指輪を買った。ニューヨークに着いて間もなく、私は船着場に行って彼女が乗船予約したのを知っている船を出迎えた。彼女がタラップをおりて来るのが見えた。彼女が楽しそうに話しているぱりっとした若い男がちらっと見えた。私たちは会ってキスした。残念なことに、彼女は一座が1,2時間以内にシカゴ行きの列車に乗るので、ニューヨークには一日もいられないと知った。私たちは私が行ける時に彼女の芝居を観に行くことと決めた。私は仕事でニューヨークに3,4週間引き留められたので、自由になるとすぐ電報を打って、翌日シカゴに行くことと知らせた。

私は着くと、ロージーが泊まっているホテルに部屋を取った。私は彼女に電話をかけた。彼女は私から連絡をもらって嬉しそうだった。彼女が緊張するので芝居は観に来ないでほしいと言うので、私たちは芝居が終わったら彼女に割り当てられていた小ぢんまりしたスイートルームで一緒に夕食を取ろうと決めた。私はその夜ずっとだらだらと過ごしていたが、10時半頃にロージーが私の部屋に電話をくれて用意はできたとやった。私は彼女と合流した。彼女は最高に魅力的に見えた。私が夕食を注文し、私たちが食べる間、彼女は芝居のことを話した。彼女はそんないい役をもらったことがなかったので、個人的な成功を手にして喜んでいた。その後、私はボーイに電話してに夕食の食器類を下げさせた。とりとめのない話を少しした後、私は言った。「ロージー、僕は君に結婚を申し込むためにシカゴに来たんだ」彼女は一瞬間を置いた。「そうなの？」と彼女は言った。「どうなの？」と私はほほえんだ。私は彼

女の答えを確信していた。彼女は間を置いたが、私には実に長い時間に思われた。それから、「あなたと結婚はしたくない」と彼女は言った。私はびっくりした。私は彼女が長い間ずっとそうしたがっていたと思っていた。「本気なの？」と私は尋ねた。「ええ」「どうして？」と私は尋ねた。「ただしたくないだけ」私は彼女が信じられなかった。私は彼女がもっと押してほしいのだろうと思った。私は馬鹿馬鹿しいと思ったが、彼女に合わせる用意はあった。私は続けた。「君が 2 週間前に退職予告をすれば、誰か君に代わる人を見つける時間はあると思う。そして、僕たちはすぐ結婚して、サンフランシスコ行きの列車に乗ろう。それから、タヒチ行きの船に乗るんだ」「素敵だと思う」と彼女は答えた。「私の役は譲りたくない」「馬鹿馬鹿しい」と私はいらいらしながら言った。「素晴らしい評価をもらったの」と彼女は言った。私はポケットから買っておいた婚約指輪を取り出して彼女に手渡した。「君のためにこれを買ったんだ」彼女はそれを見た。「とてもきれいね」と彼女は言った。思い返してみると、それほどきれいだったとも思えない。小さなダイヤモンドリングに大きめのパールが 2 つはめこまれていた。彼女はそれを私に返して寄こした。「持ってなよ」と私は言った。「いいえ、そのつもりはないわ」「本気なの？」と私はつぶやいた。「私とベッドに行きたいのなら、いいのよ」と彼女は言った。「でも、あなたと結婚はしない」私は頭を振った。「いや、そんなことするつもりはないよ」私たちはしばらくの間座っていた。私はそれを中断して言った。「それじゃ、もう何も言うことはないんだね？」「ええ」と彼女は答えた。彼女は私が出て行くのを望んでいることが分かった。私は指輪をポケットに戻すと、立ち上がって彼女にキスし、さよならを言った。

私は翌日ニューヨークに戻り、そのすぐ後イギリスに帰った。数週間後、ピカデリーを歩いていると、新聞売りが掲げている「イブニング・スタンダード」紙のプラカードが目に入った。大きな文字で、「女優、伯爵の子息と結婚」と読めた。私はすぐにその女優が誰か見当がついたので新聞を買った。間違っていなかった。新聞はロージーがシカゴで貴族の息子と結婚したことを報じていた。これはロージーがニューヨークに着いた時、タラップをおりながら楽しそうに話していたぱりっとした若い男だと思った。これで彼女が私との結婚を断わった理由が分かった。私はロージーのことをよく知っていた。あのぱりっとした若い男が旅行の初めから終わりまで粘り強く口説いたとしたら、彼女はその誘惑に抵抗できなかっただろうと思った。私はこういうことになると彼女がいかに軽率かも知っていた。私は、彼女が私と結婚するのを断わった時、妊娠していると確信していた。彼女とは二度会うことがなかった。あのぱりっとした若い男の方が私よりずっといい夫になったのは確かだ。2,3年前、「タイムズ」紙の死亡欄で彼女の死が発表されているのを見た。その当時、彼女は 70 歳をとうに過ぎていたはずだ。私は今でも彼女のことを優しい気持ちで思い出す。繰り返すが、人に対して、彼女は私がそれまでに見た中で最も美しい笑顔をし、身持ちの悪さにもかかわらず、実に人のいい、実に優しい女だった。ロンドンに戻るとすぐに、私は婚約指輪を売ってくれた宝石商に返しに行き、10%差し引いただけの金を受け取った。

私は書くために生まれた。生まれたばかりの子供が呼吸を始めるのと同じように書き始めた。まだ 10 代のうちに最初の短編小説を書き、医学生の間は手当たり次第に書いたメモでノートを埋め尽くしていた。遅かれ早かれ、ロージーが小説の登場人物として使えると確信するようになるのは当然だった。私はそれについてさんざん考えた。登場人物はすぐそこにおいて、私の心の中で生きいきとしていたが、モデルを基に作った美しい人物がもっともらしい役を演じるような形の小説ではどうしても組み立てられるものがなかった。私は心の中でいろいろな案をあれこれと考えたが、どれにも満足できなかった。

15年経って、突然、出し抜けて、どこから湧いたのか分からないが、正に私の要求にぴったりの案が浮かんだのだ。それはかつてはやったジグソーパズルみたいなもので、最初に持っているのはごちゃまぜのピースだが、最後にはきちんと並べてちゃんとした絵にできるのだった。私の心の中にあった小説は実に鮮明だったので、書こうと座った。これほどすらすらと喜んで書いたことはなかった。私は『お菓子とビール』（*Cakes and Ale*, 1930）と名付けた。私のすべての本の中で、最も好きな1冊だ。この本が世に出ると、批評家たちは私がトーマス・ハーディ（1840～1928、イギリスの小説家）の生き写しを書いたと主張して非難した。彼とは一度だけ会ったことがあった。私はセント・ヘリア夫人のところで食事をしていただけだが、夫人は文学者を貴族と混じらせるのが好きだった。ハーディも招待されていて、食事の後ご婦人方が上に上がって男どもがポートワインを飲んで葉巻を吸っている間、気がつくとい私は彼の隣に座っていた。私たちはご婦人方と合流する時間になるまでおしゃべりした。二度と会うことはなかったし、実物の彼のことは何も知らなかった。実際のところ、批評家たちがハーディの生き写しだとみなしていた登場人物は、私がヘンリー叔父の後見を受けていた時にホイトスタブルで知り合いだった評判のよくない作家を基にしたものだった。作家は何がしかの創作力をもっていると信じられるべきだ。エドワード・ドリフィールドと名付けた登場人物は、私が書くべき話に必要なことから、たとえ引いてくるモデルがなかったとしても、生みだしていただろう。

第2部
(*Show*, July, 1962)



1913 年も終わりに近いある晩、私が書齋に座って本を読んでいると、カーステアズ夫人という人から電話があった。彼女は、ノードラーと呼ばれている（特に 13～17 世紀のヨーロッパの）古い大画家たちの作品の画商として有名な会社のロンドンの代理人の妻だった。カーステアズ夫妻はチェスタフィールド・ストリートの私の家から 2 軒先に住んでいた。カーステアズ夫人は電話で、その晩、夫妻は男と女、2 人の人たちと一緒に食事をして、その後、芝居を観に行くつもりだったのだが、（当時、芝居が始まるのは 9 時だった）男の方が何かの理由で夫妻の期待に添えないので、夫人は私に、助けるとしてその男の代わりになってくれないかと言うのだった。たまたまその晩は何もすることがなく、夫妻が客を連れて行こうとしている芝居は観ていなかったのので、私は喜んで行きますと言った。たまたまその晩私に先約がなかったという偶然がこの先長く私の人生に影響を及ぼすことをどうして私ができるのだろうか？ 私は着替えをしてカーステアズ夫妻の家までの僅かな距離を歩いて行った。客間に案内されて夫妻と握手をすると、ウェルカム夫人というとてもかわいい女性に紹介された。彼女は美しい茶色の目をしていて、肌も美しかった。流行の先端をいく素晴らしい服装をしていて、指には大きなカボションカットのエメラルドをはめていた。その時、私はそれが模造品だとは知らなかった。彼女は非常に魅力的だった。私たちは夕食に下りて行った。その晩、私はいつになく上機嫌だったと思う。ある時、夕食も終わろうという時、カーステアズ夫妻が電話口と呼ばれると、ウェルカム夫人はその輝く目で私を見ながら小さい声で言った。「あんな芝居を観に行かなくてもよければいいのに。一晩中あなたが話すのを聞いていたいわ」実に、実に気持ち良かった。しかしながら、私たちは劇場に行き、サヴォイ（ロンドン的高级ホテル）で夕食を食べた。ウェルカム夫人をどこだったか泊まっているところに降ろす時、彼女は言った。「すぐにまたお会いしなきゃ」

翌日、私はカーステアズ夫人に会いに行った。私は夫人に、あなたの小柄な友達は魅力的でとてもか

わいらしいと思うと言った。カーステアズ夫人が言うには、あの友達はバーナード・ホームズ（孤児院）の創設者トーマス・バーナード（1845～1905、イギリスの慈善家）の娘だということだった。彼女は、バローズ&ウェルカムという会社の共同経営者でウェルカムという名前の 20 歳以上年上の男と結婚していた。彼は若い妻をかなり乱暴に扱ったものだから、結婚から 5 年後、彼女は彼を捨てたのだった。弁護士によって別居の条件が定められ、彼は、噂では、年 5,000 ポンドを支給することに同意していた。ウェルカム夫人には夫との間に男の子があり、別居の条件として、1 年の一定期間一緒に過ごす権利があった。

2, 3 日後、私はたまたまオペラを見ていて、ウェルカム夫人が特別席に座っているのを見かけた。幕間に、私はご機嫌をうかがいに行った。彼女は私を見て嬉しそうだった。彼女は、リージェンツパークに最近買った家を模様替える間借りたひどいフラットに住んでいるので、会いに来てと誘うこともできないと言い、引っ越したらすぐにでも開くつमりの新居披露パーティーに来てほしいとも言った。その後に出会った時のことは覚えていないが、すぐにクリスチャンネームで呼び合う仲になったくらいだから、頻りに会っていたのに違いない。彼女のクリスチャンネームはシリーだった。1 月になると、私が書いた『約束の地』（*The Land of Promise*, 1913 初演）という芝居がリハーサルに入った。たまたま初日の夜がシリーが新居披露パーティーを開く予定の日と同じ日になり、私は彼女に最前列の特別席を 2 席用意した。彼女が到着したのは幕が上がってから数分経ってからだった。私は腹を立てて、パーティーには行くまいと決めた。しかし、私は芝居の初日を祝おうという招待をいろいろ受けていたのを断っていたのだが、独りで家に帰るくらいならと思い、結局パーティーに行った。そこには大勢の人たちがいた。シリーはオーケストラを雇っていて、私たちはダンスをした。私は芝居に行っていた人たちから祝辞をもらって楽しかった。私は深夜に帰宅した。その後はほとんど毎日シリーと会った。2, 3 週間後、彼女はオルセー通りにアパートを持っていてパリに行くつもりだと言い、私と一緒にいかないかと提案した。運悪く、同じ船には乗れなかったが、パリに着くと、私は彼女に電話して食事に連れ出す約束をした。食事が終わると、私たちはアパートに戻り、その夜は彼女と一緒に過ごした。私はロンドンで忙しく、翌日戻らなければならなかったため、彼女が戻るまで会わなかった。それからは毎晩彼女の新しい家で一緒に食事をし、しかるべき後にベッドを共にした。すべてが実に楽しかった。シリーが私に首ったけだと言うと、私は笑ったが、嬉しくて本当だろうと思った。私は彼女の遊び人の男友達たちとは違っていた。彼らは、若かろうと、中年だろうと、年配だろうと、チロズで食事をしたり、フォア・ハンドレッド（上流階級を意味する名称）で夕食を食べてダンスするような男たちだった。当時は人生が楽しく、誰もが有り余るほどの金を持っているように見えた。私は変化そのものだった。成功した劇作家であり、演劇界と関係があることでロマンチックな魅力のようなものを手にしていた。

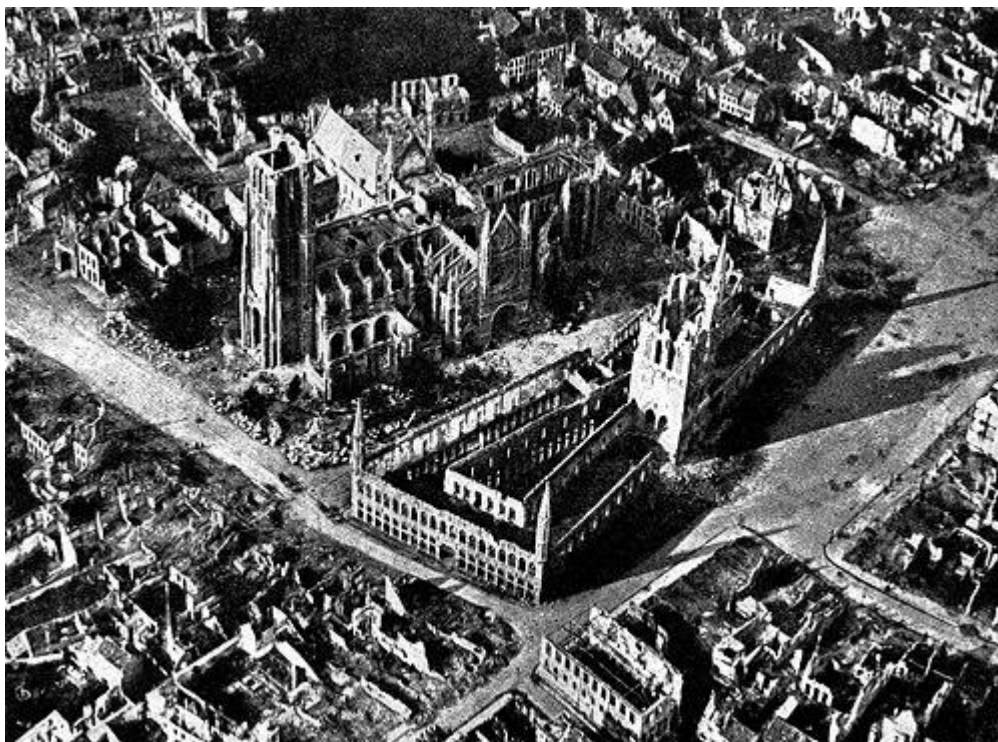
ある日、私たちがリッチモンド（ロンドン特別区）までドライブして公園を散歩していると、彼女は子供を作ろうと言って私を驚かせた。私は彼女が冗談を言っているのだと思った。私はそれに伴う困難を指摘した。彼女はそれを一蹴した。彼女には弟がいて、最近妻と共にカナダから戻って来たのだが、子供がいないので、赤ん坊が産まれたら、彼らが喜んで引き取ってくれて、私たちはいつでも好きな時に会いに行ける。3, 4 年後、彼女が養子として引き取れば、誰も彼女が母親だとは思わないというのだ。

私はその気になったことをみとめなければならない。彼女はすべて単純で簡単なことにしてしまうし、私も子供の父親になると思うと楽しかった。私は、必要があれば立派に子供を養えると思える程度には裕福であった。それでも、その計画は好ましくなかったの、私はシリーにその当事者になるつもりはないと言った。春が来ると、シリーは友人たちがいるビアリッツ（フランス）に行き、しばらくして私も合流した。そこでは私たちも楽しかった。私は彼女にスペインのことを話したことがあった。私は何回かそこで長期間過ごしたことがあり、その国と国民が大好きだった。シリーは、ロンドンから彼女の車を取り寄せれば、北の海岸沿いにドライブできると提案した。ひょっとすると、彼女は私の対応に躊躇している気配を感じたのかもしれない。彼女がこう言ったからだ。「何も恐れる必要はないのよ。ウェルカムとの合意で、二人ともあらゆる意味で完全に自由なの」私は彼女の言ったことに大して注意を払わなかった。私がスペインを旅行したら楽しいだろうと言ったので、彼女は電報を打って車を取り寄せ、車が届くとすぐに出発した。彼女はメードを連れて行き、私たちは非常に楽しい旅をした。

彼女は相変わらず子供を産みたがっていて、私が反対するとすべてに反論した。彼女は実に口がうまく、とうとう私は譲歩した。私たちはビアリッツに戻り、パリまで車で行こうと決めた。私たちは旅の最初の夜をボルドーで過ごした。そこで初めて、私たちはシリーが考えている目的でセックスをした。楽しいだけではなく、馬鹿げているかもしれないが、厳粛な、神聖と言ってもいい肉体的行為に携わっていると思うと、私は妙な気がした。ロンドンに帰ると、私たちはパーティー漬けの生活を再開した。私たちが出入りする集まりでは、私がシリーの愛人だということは暗黙の了解事項だった。彼女は実にかわいらしく、陽気で、常に美しく着飾っていた。私は彼女のことが自慢だったし、自分にも満足していた。そうこうしているうちに、彼女から妊娠したと告げられた。その時まで、私は彼女が子供を産みたがっていることを本当には信じていなかった。私は漠然と、彼女は子供を産むと決心する時の興奮が好きなのであって、いざとなったら、怖くなってその計画をやめるだろうと思っていた。何週間かが過ぎた。ある朝、彼女から電話があつて、来てほしいと言われた。彼女はやつれて青ざめた顔でベッドに横になっていて、流産したと言った。私はとても残念だと言った。すると、彼女は私に二人の関係を終わりにしたいかどうか尋ねた。私はびっくりした。彼女は具合が悪くて元気がなかった。決めるのは彼女だということ以外、何が言えただろうか？ 彼女は私に終わりにしたいかとまた尋ねた。私はそんなことはないと言ったが、事実それは本当だった。彼女はすぐにまた起きて歩けるようになった。

シリーには夏の間 2 か月自分の男の子と過ごす権利があつて、その子と自分の母親を連れてどこか田舎に行こうと決めた。私は 7 月と 8 月の間、カプリ島に家を借りて、旧友のジェラルド・ケリーに泊まらないかと誘った。私たちは 7 月を、海水浴をしたり、テニスをやったり、美しいが当時はほとんど人が来なかったその島をぶらぶら歩いたりして過ごした。8 月 4 日、第 1 次世界大戦が勃発した。随分遠くのことのように思えたので、私たちはあと 1, 2 週間滞在してからイギリスに戻ろうと決めた。突然、シリーからの電報を受け取ったのだが、ローマから送られてきたもので、カプリに来るつもりだと言っていた。私は電報の返事を送って、私たちは発つところだから来なくてくれと言った。彼女は私からの電報を無視してやって来た。3, 4 日後、私たちは島を発つてイギリスに帰った。私が最初にやったのは、当時大臣だったウィンストンに手紙を書いて、私でも役に立てることがあるかどうか尋ねることだった。彼はイギリス政府の要人に持って行く書状を送って寄こした。私は 40 歳で、大抵のイギリス人よりフランス語がうまく話したり書くことができること以上の取り柄がなかった。海軍省の事務仕事よりまし

な仕事をもらうことは期待できなかった。当時の多くの人たちと同じように、私は戦争は2,3週間以上は続かないだろうと思った。私に関する限り、先の見通しは暗かった。その後、たまたま、赤十字がフランスに多数のフォード製救急車を送っているの、私がしかるべき方面に志願すれば、通訳として連れて行ってもらえるだろうということを知った。私は手続きを踏んで、その結果、それなりの時間のうちに、カーキ色の軍服を着て、救急車と共にイギリス海峡を渡った。私たちは混合部隊で、将校クラスの者もいれば、一兵卒の者もいた。数週間の間、私たちは多少なりとも役に立つことをしながらフランス北部を歩き回り、最終的にポペリング（ベルギー）のフランダースに駐在した。ある日の午後、何もすることがなくて、仲間の一人である医者、13世紀に建てられた衣料会館（Cloth Hall）は見る価値があると言われているから、それを見にイープルまで私が運転する車で行かないかと誘った。それは、実際、巨大な、かなり装飾の多い様式のもので、最も長い側面は500メートルもある立派な建物だった。言うなれば、垂直の2つの高い煉瓦塼で組み立てられていた。私は救急車を駐車し、二人でその非常に長い側面に沿って端から端まで歩いてその先の壁のところまで行った。私たちは壁に向かって立ち、しばらくの間その見事な建物を見つめていた。そして、私は言った。「反対側から見に行こう」私たちはぶらぶら歩いて壁のところに戻り、改めて見に来たものをよく見た。突然、ものすごい衝撃音がして、私たちはびっくりした。砲弾が私たちが離れて来たばかりの壁にぶつかって爆発したのだ。「間一髪だったな」と連れが言った。彼の言う通りだった。さっきの壁のところにあと5分いたら、二人とも完全に死んでいただろう。救急車を壁に一番近い所に止めようとせずに、巨大な側面に沿って歩き、さっきの壁の側にいたのに理由はなかった。全くの偶然だった。



イギリスを発つ少し前に、シリーはまた妊娠したと言った。私は慌てた。彼女はわっと泣き出した。

彼女はすすり泣きながら、私をすごく愛しているからこそ、子供を産みたいのだと言った。彼女のせいで、私は自分がひどい人間のような気持ちになった。とうとう、彼女がもう体の状態を隠せないようになったら、私が迎えに行き、どこか出産の床につけるところに連れて行くこと約束した。フランスに行き、間もなく、私は戦争が長く続くことを実感した。私はシリーに手紙を書いて、今は子供を産む時ではないと告げた。彼女は私の手紙を無視した。彼女は子供を産むものと決めていた。私は窮地にある彼女を放っておく訳にもいかず、1月のある時、部隊長に急ぎの理由でイギリスに行かなければならないと話した。私はシリーが滞在していたドーバーで会い、彼女が誰にも知られずに出産できると思われるローマに連れて行った。私たちはホテルに行き、私はピンチョの近くにアパートを借りた。5月に出産の予定だった。

私たちは、シリーがかかっているイギリス人の医者以外、ローマに知り合いはいなかった。二人だけの生活だった。私は戯曲を執筆中で、週に1,2度ゴルフもできたので気楽だった。だが、シリーの方はつらかった。彼女はローマの景色に興味がなかった。彼女は読書家ではなかった。さりとて、針仕事をするような女でもなかった。日々が果てしなく続くように思えた。私たちは話し合った。私は自分が彼女の初めての愛人ではないことをよく知っていた。彼女は私に愛人のことを話すのが楽しかった。私にはどれを信じていいのか、どれが私を感心させたくて作った話なのか分からなかった。私が聞いたのは、彼女がパリに住んでいた時にグラモン公から高額な手当を払うから愛人にならないかと誘われたことがあったが、彼が要求したのは毎週木曜日にレストランで一緒に食事をするだけだったという話だった。名前は忘れたが、ブルボン王家の王子がヨットで一緒に世界を回らないかと彼女を誘ったとも言った。ゴードン・セルフリッジ (1858~1947、イギリスの高級百貨店セルフリッジの創業者) が彼女にぞっこんで年5,000ポンド上げようと提案した。彼女は断った。彼女は彼のことを面白おかしく話してくれ、彼女から聞いたことを基に、私は『おえら方』(Our Betters, 1917 初演) という戯曲の登場人物を創作した。ある日、シリーが言うには、一日だけセルフリッジがパリにやって来るようになっていたが、彼に煩わされたくなかったので、彼女は出掛けてしまってその日は彼が彼女の母親と過ごすのに任せたことがあったそうだ。私は彼女ほどおかしいとは思わなかったが、そう言わなかった。

当時の私たちのように何もすることがなく親密に生活していれば、シリーが度々父親の話をするのも当然だった。父親は1905年に亡くなっていたが、彼女は敬服し愛していた。それ以来、私は彼のことが書いてある2冊の本を読みたいと思っていた。その2冊の本には、著者たちがなぜか苦勞して彼がユダヤ系の生まれであるという事実をごまかしているために、やや困惑する部分があった。彼は実際、ドイツで反ユダヤ主義の波があった1846年の後ハンブルクを逃れてダブリンに落ち着き、そこでキリスト教に改宗してダブリンの娘と結婚したドイツ系ユダヤ人の息子だった。二人には子供がたくさんあって、暮らし向きはつましかった。一番上の息子トーマス・バーナードは15歳の若さで弁護士事務所に働きに行かされた。彼はその時まで不可知論者(人間にとって、認識できないものは存在しないものと同様であるため、神は存在しないとする立場)だったと言われているが、17歳の時に福音主義(プロテスタントの一派で形式よりも信仰を重んじる)に転向した。その後、彼は中国での医療伝道師になろうと決意し、同じ宗派の友人たちの経済的援助を得てロンドンの医学校に入った。彼はロンドンの病院で課程を終えた。学生時代の間、彼はダブリンとロンドンのスラム街でなおざりにされている子供たちの状況に慄然とし、資格を取ると、医療伝道師として中国に行くという考えを捨てて、気の毒な貧乏

人の子供たちのためにできることをやろうと心に決めた。彼は非常に精力的だった。シャフツベリー卿（1801～85、イギリスの福音主義の政治家・社会改良運動家）の資金援助を得て最初のバーナード・ホームズを設立した。彼は結婚して、たくさんの子供、5人の息子と、その内3人は早い内に死んだが、2人の娘を作った。

彼の結婚に際して、物惜しみしない支持者のジョン・サンズはエセックス州のイルフォードにあるモスフォード・ロッジと呼ばれている家を彼にやった。その隣には馬車小屋があり、バーナードは早速それを貧困者や孤児の女の子たち用の家に変えた。貧困者や孤児の女の子たちの人数が増えると、彼はそれを入れるためにすぐ隣に少しずつ小屋を建てていった。最終的に、60エーカーの土地に65人が散らばっていた。伝記には引越についての言及がないので、読者はバーナード一家がモスフォード・ロッジに住み続けたと思ってよいだろう。しかしながら、当時クイニー（クイーンちゃん）で通っていたシリーが17歳の時、単純でありあまり聡明でない女だったバーナード夫人は、一家がホームに囲まれてイルフォードに住み続けていたらほとんど出会うことを望めないような人たちや、もしかすると求婚者になるかもしれない人たちと出会う機会をかわいい娘に与えるべきだと言って、夫を説得した。バーナード医師はその趣旨を理解し、サービトンに一軒家を借りた。彼の功労に対して管財人が認めた年わずか600ポンドの収入で大家族を支えるのは、当時生活費が安かったとはいえ収入の範囲内でやっていくのは難しかった。足しにするために、バーナード家は、医者や慈善活動に大いなる興味を感じていて、しばらくの間、彼の会社バローズ&ウェルカムを通じてホームズへ医療用品を惜しみなく供給し続けていたウェルカム氏を下宿人として置いた。その結果は、すでに言ったように、結局彼はシリーと結婚したということだ。彼女は22歳で彼は48歳だった。

シリーの出産が近づいてくると、バーナード夫人がローマに来て、私が借りていたアパートに落ち着いた。私はそれまで彼女に会ったことがなくて、かなり緊張していた。その状況を彼女がどう思っているか、分からなかった。彼女がごく自然なことだと思っていたので私は安心した。ある晩、シリーに最初の陣痛がきたので、すぐに医者をつ呼んだ。すべてがごく簡単に行きそうに思えたが、シリーは、あいにく、何年か前に大変な手術を受けなければならなかったので通常の分娩が無理だということを医者に告げていなかった。彼女がひどく痛がって、医者は彼女の命を救うには病院に連れて行って産婦人科の外科医に任せるしかないと言った。私はバーナード夫人の承諾を得て、救急車を呼んだ。その時には真夜中になっていた。外科医は帝王切開を行い、子供、女の子が無事に生まれた。2,3日後、医者は、私の考えでは不必要だったが、シリーに、もう1人子供を産むのは無理だと告げた。彼女はひどく泣いた。私は慰めようと最善を尽くした。私にはそれしかできなかった。だが、彼女には素晴らしい回復力があり、医者が彼女に言わざるを得ないと思っていたことを諦めてしまうと、すぐに回復した。その後3週間で、私たちはロンドンに帰ることができた。シリーは普段の生活を再び始めた。

まだ戦争の真っ最中だった。私は何もすることがなかった。救急車部隊に戻ることもできず、私を必要としている人間はいそうもなかった。シリーには、情報部の重要人物の愛人になっている友人がいた。その重要人物をRと呼ぶことにしよう。シリーは彼が私のために何かできるかもしれないと言った。私

は彼に会った。、言わせてもらえば、彼はどう見ても上位中流階級辺りのごく普通の男だった。目先が利くことに疑いはなかった。私たちは2,3度4人で一緒に食事をしたが、私は、彼が社会の状況を知らず無邪気に高貴な婦人だと思っている美しい女性の愛人であることを過度に喜んでいることに気づいた。彼は喜んでその愛人を楽しませ、その愛人は喜んでシリーを楽しませようとした。Rは私がフランス語が流暢に、ドイツ語も普通に話せることを知ると、私を使えると思うと言った。しばらくして、私は表向きは平穩無事な中立国で戯曲を書くためにスイスに行き、神経が衰弱したスパイの代わりをすることが決まった。しかしながら、私はすぐには必要とされなかった。



ある朝、シリーが電話を寄こしてすぐ来てくれと言った。当時、彼女はピカデリーからカーズストリートに行く通りの1つにあるホテルに住んでいた。私は行った。彼女はひどく取り乱していた。「一体どうしたんだ？」と私は尋ねた。彼女は弁護士からの手紙を私に寄こした。「ウェルカムは私と離婚するつもりなの」と彼女は言った。私は愕然とした。「でも、君は別居に関する合意で、自由に好きなことができると言ったじゃないか」と私は言った。「知らなかったの」と彼女はうめいた。「それでいいと思ってたの」私は手紙を読んだ。私は共同被告（被告と姦通したとされる相手）として名前を挙げられていた。「こうなると、僕たちは抗弁のしようがない」と私は言った。「弁護士に連絡した方がいい」旧友に事務弁護士がいたので私は会いに行った。私は彼に本当のことを全部話した。彼は、そういう問題を扱うことで定評のあるジョージ・ルイス卿に任せるようアドバイスしてくれた。私はそのようにした。それから2,3日は悩ましかった。ウェルカムは長い間シリーを監視させていたようだった。探偵は彼女の大勢の男たち——その中にはゴードン・セルフリッジもいた——との不貞の証拠を掴んでいたのだが、その中で私が共同被告に選ばれたのは、私が未婚で裕福だったからだ。ある晩、私が家で友人と静かに食事をしていると、すぐ近くのホテルに泊まっているシリーから電話があった。彼女はベロナール（催

眠・鎮静剤バルビタールの商品名) のカプセルをたくさん飲んでしまい、自分のしたことが怖くなったと言った。幸い、友人が医者だったので、二人ですぐホテルに行った。彼女はさっき言ったことを繰り返すだけで、私はどうしてそんなことをしたのか尋ねた。「自分でも分からない」と彼女は言った。医者は仕事に取り掛かった。そうしている間に、私はバーナード夫人に電話して、すぐ来てくれと頼んだ。彼女はいつも通り冷静沈着で、まるでシリーが自殺しようとしたことが世間の人がすることの1つにすぎないかのようだった。48時間して、シリーはまたすっかり元気になり、(支配人が安心したこと)に別のホテルに引っ越した。どうして彼女がそんな馬鹿なことをしたのか、私には見当もつかなかった。彼女が私に、ヘンリー・ウェルカムが離婚するつもりだと言った時、私が一瞬うろたえたのにショックを受けて、私を脅すためにベロナールを飲んだのだろうか。

次の2,3週の間、私は何回かジョージ・ルイスに直接会った。私はそれまで知らなかったことをたくさん知った。シリーとウェルカムが別居した時、彼が同意したのは、一般に思われているように年5,000ではなく、月200ポンド与えるということだった。そうすると、彼女がリージェンツ・パークの一軒家の賃借権を買って、彼女のように家具を備え付け、彼女のように着飾って、彼女のようにパーティーを開くことができないのは明らかだった。彼女は車とお抱え運転手、コックとキッチンメイド、執事とパーソナルメイドを使っていた。その金を出していたのはセルフリッジだった。私はジョージ・ルイスが思うほど驚かなかった。結婚するまでシリーは非常につましい環境にいたので、別居に際してウェルカムが月200ポンド与えることに同意した時、裕福に暮らせると思えたに違いないが、フランス人が優雅に「上流社会の趣味的恋愛 (la haute galanterie)」と呼ぶ社交界に入ると、すぐに自分の手当では不十分なのを知った。彼女が付き合う困われ女たちと対等に会うためには高価な衣装、車、メイド、どこか住む所が必要だった。大喜びで彼女が望むだけのものを与えようという金持ちは複数いた。彼女がその連中にそうする喜びを与えたとしても驚くにはあたらなかった。それはあまり結構なことではないかもしれないが、理解することはできた。私は自分がいかに機転のきかない男だったかを悟った。かつて、私たちはたまたま彼女が開いて盛会だったパーティーのことを話していたのだが、私は彼女にまた開いたらどうなの、と言ってみた。「その余裕がないの」と彼女は言った。「200ポンドかかるもの」当然、私はこう言うべきだった。「そんなことで悩まないで、僕が払うよ」そんなことは思いも寄らなかった。別の時には、私たちが一緒にランチを食べていると、彼女は買いたいものがあるから一緒に来てほしいと言った。私は面白そうだと思って、行くことに同意した。私たちは女性用のあらゆる物を売っているボンドストリートの高級店に行った。そこに1時間いた。彼女が選んだのは、小柄な体にフィットしやすい夏のワンピース2着、家の中をぶらつく時に着るダークグリーンの子の絹のパジャマを数着、朝食を取る時にベッドで着る細身の絹のジャケット、そのほか1,2点だった。彼女はそれを全部リージェンツ・パークの自宅に送らせるようにして店を出た。2,3日後、私はシリーにみんな無事に届いたか尋ねた。「あら、送り返したわ」と彼女は言った。「改めて見たら、気に入らなかったから」私は今ならあの時こう言うべきだったのが分かる。「全部僕に払わせてくれなきゃ。君の誕生日の贈り物にするよ」シリーを正當に扱うために、彼女は私に失望している素振りは見せなかったことを付け加えなければならない。彼女はいつも通り元気で魅力的だった。私の対応の仕方はけちだからではなく、無知によるものだった。私はシリーがたくさん金を持っていると信じていて、友人が私をサヴォイでのランチに招待し

てくれた時に自分が勘定を払うことなど思いも寄らないのと同じように、彼女のワンピースの代金を払うことも思いつかなかったのだ。私は何年もベジーク（2人または4人が64枚の札でするゲーム）をやり続けていたが、今度は、決まりを全く知らないのにブリッジ（4人が2組に分かれ、13回のうち何トリックに勝つか予想して賭ける）の試合に加わるよう誘われている人間みたいだった。そういう人間は物事をめっちゃめっちゃにするに違いない。

当面、訴訟の件は進展しそうにもなかったので、古くからの知り合いだったジョージ・ルイスは、じっくり話し合うために、サセックス州のロッチングディーンに持っている家で週末を過ごさないかと誘ってくれた。私は法廷で子供のことは持ち出してほしくなかったのだが、ウェルカムの弁護団はそれには同意してくれた。彼らは、ローマのイギリス人医師と病院の看護師たちの証言を得ていて、必要なものは揃っていた。ジョージ・ルイスはシリーのことを非常に悪く思っていた。「結局のところ」と彼は言った。「彼女は若い娘ではなく、中年の女なんだ」それは言い過ぎだった。彼女は37歳だった。「セルフブリッジは彼女と絶交した」と彼は続けた。「それで、彼女は大変な借金を背負うことになった。彼女はそれに直面して、君をカモにして救ってもらうつもりなんだ。君は見事に計略にはまって、愚かにも結婚しようとしている」「ほかにできることがあるだろうか？」と私はつぶやいた。当時、一般では、離婚訴訟の共同被告は密通した女性と結婚するものと思われていた。「君は彼女に2,3万ポンドやる余裕はあるよね？」とルイスが尋ねた。「あると思う」と私は答えた。「ウェルカムの事務弁護士たちは、君が彼女と結婚しなければ、彼が彼女に年1,000ポンドやると言っている。彼女は飢え死にしないだろう」私はため息をついた。「君は彼女と結婚したいのか？」とルイスは苛立ちながら尋ねた。彼は私に苛立ち始めていた。「いいや」と私は言った。「でも、そうしないと、僕は一生後悔するだろう」彼は肩をすくめた。「それなら、もう何も言うことはない」私は彼に、もっぱら赤ん坊のことが気になりだということでは言わなかった。もし私が赤ん坊の母親と結婚しなかったら、赤ん坊の将来はどうなるだろうと思うと耐えられなかった。

この後すぐに、私はイギリスを発たなければならなかった。私はルツェルンに行くよう命じられていたのだが、そこにはドイツ人妻と暮らしているイギリス人がいて、情報部はそのイギリス人が何をたくらんでいるのかを知りたがっていた。私はその仕事を済ませてからジュネーブに行き、そこが私の本拠地になる予定だった。訴訟の件が進展しかけると、シリーは私と合流した。ちょうどその時、彼女がロンドンにいたくないのは当然だった。当時、新聞は離婚訴訟を詳しく報じるのが常になっていて、私たちの訴訟の件が『デイリー・メール』紙に載ると、世間がそれを広げた。シリーは数週間ジュネーブにいた。彼女は退屈していた。彼女は自分だけでは気晴らしができず、楽しむことを他人に頼っていた。私にはやらなければならない仕事があった。週に一度、人目を忍んでフランス領に行かなければならなかった。時にはベルンにも行かなければならなかった。好きなようにさせておかれると、彼女は苛立って、私をやっかいな状況に追い込んだ。とうとう、彼女はイギリスに帰ると決めた。私はほっとした。

スイスに1年いた後、私はもう役に立てることは何もないと思い、Rに解放してくれるよう頼んだ。私はロンドンに戻った。私は喜んでシリーと結婚するつもりでいたが、状況は相変わらずだったので、

そこに向かって突き進む心の準備ができなかった。私は、ローマで書いた戯曲『おえら方』を上演する準備のためにアメリカに行きたかった。どのみち、離婚は決定した訳ではなく、私が望んだとしても、あの時はシリーと結婚できなかっただろう。私はニューヨークに向けて出帆した。私の頭は長年心の中で温めていたゴーギャン（1848～1903、フランスの画家）の生涯を基にした小説のことでいっばいで、私の戯曲の上演の準備が済み次第、タヒチに行こうと決めた。シリーからもうすぐ着くという電報を受け取った時、私がニューヨークに来てからまだ3,4週間は経っていなかった。私は彼女のためにホテルの部屋を予約し、船着場で彼女を出迎えた。彼女は子供と子守を連れていた。1日か2日経って、彼女に私の計画がどういうものか話すと、彼女はひと騒ぎ起こした。私は彼女に、自分が作家であり、タヒチに行くのは仕事をするためだということを示した。3,4か月以上行っているつもりはなく、私が戻って来る頃には、離婚も決定的になっているから、私たちは結婚できると付け加えた。私が行く決意が固いことが分かると、彼女はあきらめて受け入れた。私は独りだけで旅行したくなかったので、ジェラルド・ハックストンという若いアメリカ人を一緒に来ないかと誘っていた。私が彼に初めて出会ったのは、戦争の始めの頃のフランスで、その時彼は救急車部隊の隊員だった。私が彼に引かれたのは、計りしれない生命力と冒険心ゆえだった。私は間を置いてたまに彼と会っていた。彼はこの時シカゴでぶらぶらしていて、喜んで私の誘いを受けた。私たちは旅行に出発し、私が手に入れたいと望めるだけの材料をすべて手に入れた後、約束した通り帰って来た。ニューヨークに戻る途中、ジェラルドをシカゴに残して仕事に就かせた。彼は実に役に立つ同行者だった。シリーと私はニュージャージー州で結婚した。ニューヨークで短い間過ごした後、私たちは、名前は忘れてしまったが、海辺の場所に行き、子守と子供も一緒に、ホテルの敷地内のコテージを借りた。

私たちがそこに行ってから長くない頃に、私の家族の旧友であるウィリアム・ワイズマン卿（1885～1962、イギリス情報部員・銀行家）から電話があつて、ニューヨークの事務所に会いに来ないかと誘われた。私は行った。彼がした提案に、私は驚いた。私の言うことを信じてくれる人がいるとは思わなかったが、今私が書くことはたまたま本当なのだ。かいつまんで言うと、私がロシアに行って、ロシア国民に戦争を続けさせろということだった。私は、合衆国が半分、イギリス本国が半分拠出する大金を与えられるはずだった。その金で、メンシェビキー派（ロシア社会民主労働党の少数派・穏健派）が兵器を買い、計画を支援する新聞社に資金を供給することを可能にさせられるのだった。4人のチェコ人が一緒に行つて、私がペトログラードに到着し次第、私が必要とする手助けをしてくれるだけでなく、60,000人の忠実なチェコ人を統率しているマサリク（1850～1937、チェコスロヴァキアの政治家・哲学者、1918～35 初代大統領）と接触できるようにしてくれることになっていた。私はワイズマンに、期待されているようなことをするだけの能力はないと思うと言った。彼は、君が最も適任なのは決まったことだと答えた。もちろん、スイスでは、軽喜劇の作家として中立国で暮らすのが有効だと思ったという私の口実が役に立っていたことは分かっていた。スイスの当局はそれを道理にかなったこととして受け止めていた。私はワイズマンに心を決めるのに48時間欲しいと言った。スイスで過ごした冬の間中、私は時々悪天候にさらされて、軽い気管支炎にかかったことがあった。ニューヨークでは出血があった。セント・トーマス病院での学生時代以来、それが何を示しているかをよく覚えていたので、ワイズマンのところを出るとすぐに、肺の専門医である知り合いと会う約束をした。次の日に会って、診察してもらった。

私は彼が知る必要があると思うことを話した。彼は私の上の肺葉が冒されているのを見つけた。彼は言った。「平時だったら、君を2,3か月サナトリウムに行かせるんだが、戦時中となると、危険を冒してはいけない理由が分からない」そう言われて、私はワイズマンに会いに行き、仕事を引き受ける準備ができたと言った。

シリーは文句の一つも言わずに私の出発を受け入れた。チェコ人の1人が私に会いに来た。私たちは列車でサンフランシスコまで行って、それからウラジオストックまで船に乗り、そこからシベリア鉄道でペトログラードまで行くことになっていた。命令は、チェコ人と私はお互いに全く知らない者同士のように思わせて、話し合うのは、もし必要ならだが、ただただ用心するしかなかった。私たちは出発した。列車にはサンフランシスコに向かうアメリカ人も3人乗っていて、私はすぐ知り合いになった。彼らはペトログラードに行って合衆国大使館の職員になる予定だった。彼らは私の名前は知っていて、私がロシアに行き『デイリーテレグラフ』紙のためにその状況について記事を書くを知って興味を持った。彼らは愉快で楽しい連中だった。私たちは同じテーブルで食事をし、一緒にカクテルを飲んだ。2日目過ぎる頃、私が3人のうちの最年長者と静かにマティーニを飲んでいると、彼が私に尋ねた。「去年の冬、デボンにいたウェルカム夫人というイギリス人の尻軽女をご存じですか？」私は「ええ、それは私の妻です」と言う勇氣はなかった。私は答えた。「いや、去年の冬、私はニューヨークにいませんでしたから」そのアメリカ人がしたのはちょっとした無駄話で他意はなく、私たちはほかの話題で話を続けた。

やっと、私は長い旅を終えた。私はペトログラードに着いて、私のために予約してあるホテルに行った。翌朝、私は大使館に行った。ある部屋に案内され、しばらく待った後、一等書記官のブルース氏が入ってきた。彼はこれ以上ないくらい冷ややかだった。私は彼に非常に悪い印象を与えたと思った。私は緊張して、ひどくもった。私は大使のジョージ・ブキャナン卿（1854～1924、イギリスの外交官、1910～1917 駐ロシア大使）が私が専用の暗号で書いた電報を転送するよう命じられていることを知っていたが、内容も知らずに転送するように求められることを彼はひどい侮辱だと思っていた。私はその筋に多くの援助は期待できないことを悟った。しかしながら、私がペトログラードに行って1,2週間も経たないうちに、アメリカ大使館員の1人から、ジョージ卿が、彼が言うには、フランシス氏（1850～1927、アメリカの外交官、1916～1917 駐ロシア大使）という大使に尊大な態度を取り続けてきたので、フランシス氏はジョージ卿に腹を立てているということを知られた。フランシス氏は大変な金持ちで、先の大統領選挙の資金援助に対する報奨としてロシアのポストを与えられていた。彼には少し荒っぽいところがあったが、傷つきやすくもあった。彼は遅かれ早かれジョージ卿に仕返ししようと思っていた。私はその大使館員に、何とかしてこの状態を打開できないかと頼まれた。私の知ったことではなかったが、できるだけのことをすると言い、そこで、かなりつれなく断られる危険を冒して、ブルースに電話し、翌朝会えないかと尋ねた。彼は私に冷たく対応した。私が状況を説明すると、彼は驚いた。ジョージ卿は自分がフランシス氏の感情をそこねていたとは思っていないのは確かだと彼は言った。誰かの、特にアメリカ大使の感情をそこねることは、最もやりたくないことだった。「結局のところ」と私は言った。「フランシスはジョージ卿に親しみやすくなってもらいたいただけなんですよ」ブルースはこれを聞くと和らいで、笑い出した。「でも、あなた」と彼は言った。「ジョージ卿は世界で最も申し分のない行儀作法を身につけていますが、どうすれば親しみやすくなれるか全く分からないでしょう。フラン

シスさんのおっしゃる親しみやすくなるとはどういうことでしょうか？」私はフランシス氏が言おうとしていると思われることをできるだけ簡単な言葉で説明したのだが、私が説明し終わると、ブルースは言った。「2,3分ここでお待ちいただけますか？ 今すぐ、ジョージ卿に会ってまいります」私は残されて半時間ほど手持無沙汰にしていると、ブルースが戻って来た。「ジョージ卿がフランシス氏と連絡を取りました」と彼は言った。「これで一件落着です。ジョージ卿からあなたにお礼を言うようにと言われました。私どもはあなたがここで何をおやりになるのか存じませんが、ジョージ卿は、もし私どもの支援が必要であれば、そうおっしゃってくださるだけでいいとあなたに言ってもらいたいとのことです」そこですぐ私たちは別れたのだが、同じ日の午後ジョージ卿は、従者を従えていたと思いたいが、二頭立ての馬車に乗ってアメリカ大使館に行き、フランシス氏を公式訪問した。後になって知ったのだが、その訪問は成功で、2人の大使は簡単に仲良くなったという。ジョージ卿がいとまを告げる時間になると、フランシス氏はジョージ卿を馬車までエスコートし、馬車が走り去ると、居合わせた多くの職員に向かって言った。「あれは勿体ぶった男じゃないよ、諸君、気のいい奴だ」

私の到着後すぐに、サーシャ・クロボトキンが私の到着を聞いて会いに来た。彼女はアナキストのプリンス・クロボトキン（1842～1921、ロシアの地理学者・革命家・哲学者）の娘で、私が知り合った時はロンドンで亡命生活を送っていた。シリーと知り合うずっと前に、私は彼女とつかの間の楽しい関係を持ったことがあったが、その関係は双方が辛辣に言い合うこともなく終わっていた。私たちは再会を喜んだ。彼女はケレンスキー（1881～1970、ロシアの革命家）政府に非常に顔がきくので、彼女が知っても構わないと思うことを話すと、支援してくれると言った。彼女は私をケレンスキーと政府の議員たちに紹介してくれた。その人たちを、彼女のアドバイスに従って、私はペトログラードで最高のレストラン、メドベードで週1回私との食事に招待した。ホステス兼通訳として振る舞うサーシャと一緒に、私をペトログラードに送り込んだ2つの政府の費用で客たちに大量のキャビアを振る舞うと、彼らはさもうまそうにがつついた。私が実際より重要な人物だとケレンスキーは思ったに違いないと思う。というのも、彼は何回かサーシャのアパートに来ては、部屋を行ったり来たりしながら、まるで私が1回2時間の公開演説会ででもあるかのように熱弁をふるったからだ。私はマサリクに会って、その分別と決断力に深く感銘を受けた。だが、サーシャを通じて会った中で最も特筆すべき人間はサヴィンコフ（1879～1925、ロシアの革命家・政治家・作家、作家名ロープシン）だった。彼は親しみやすく感じのいい男で、私たちはすぐ友達になった。彼はテロリストとして知られていて、かつてセルゲイ大公（1857～1905、暗殺当時モスクワ総督）と警察本部長のトレポフ（1812～1889、帝政ロシアの軍人・官僚政治家）を暗殺したのだった。私がかかなり緊張する仕事なのではないかと尋ねると、彼は笑って言った。「いや、ただのありきたりの仕事ですよ」彼は小説を書いている、私は興味をもって読んだ。彼はメンシェビキ派（ロシア社会民主労働党の少数派・穏健派）のリーダーで、ボルシェビキ派（ロシア社会民主労働党の多数派・過激派）に対して敵意むき出しだった。ある時、彼は何気なく私に言った。「レーニン（1870～1924、旧ソ連の革命指導者）が私を壁の前に立たせて撃つか、私が彼を壁の前に立たせて撃つか、どちらかでしょう」彼は私の任務を了解し、私たちはやるべきことについて何度も話し合った。私がペトログラードに着いたのは8月だった。私がロシアの没落は必至だという結論に達するのに長くはかからなかった。ドイツ軍は前進していた。前線にいるロシア兵たちは群れをなして脱走しており、海軍も平穏ではなく、将校たちが部下に容赦なく虐殺されたという噂が広まっていた。国民全般が平和を望んでいた。誰もが口を出したが、誰もが何もしなかった。マサリクはひどく悲観的だった。私は朝はロシア語の先生と過

ごし、夜は長い時間を重苦しい印象を暗号にすることに費やした。あと6か月早く私がロシアに送られていれば、どうにかできたかもしれなかった。あの時の状況では、傍観するしかなかった。

10月の最後だったか、11月の初めだったか覚えていないが、ある朝早く、私はケレンスキーに呼ばれた。彼は私にロイド・ジョージ（1863～1945、イギリスの自由党の政治家、1916～22首相）宛てのメッセージをくれたが、内密のものだったので、文書にするつもりはなく、直ちにロンドンに行って自分で伝えてほしいと言った。私は行くことに同意した。私はその日ノルウェー行きの列車で発ち、オスロで駆逐艦に乗り込んだのだが、その駆逐艦は嵐の航海の後、スコットランドの北岸に私を上陸させた。私はロンドンまで列車に乗った。着くとすぐ、私は首相の秘書に電話して、翌朝ダウニング街（ロンドンの中心部にある官庁街、首相官邸がある）でロイド・ジョージに会うべくアポイントを取った。首相は私を待っていた。彼は誠実だった。私に会えてどんなに嬉しいか、私の芝居がどんなに楽しかったかを語った。それから、彼は一般的な概況を話し始めた。彼は面白く雄弁に語った。やがて、私は、なぜだか判然としないが、彼は私が言わなければならないことに薄々感づいていて、私に言わせまいと決めているような印象を受けた。彼は話し続けた。私が唯一はっきりと覚えているのは彼の言葉だ。「この戦争の結果がどうであれ、フランスは二級国になってしまうだろう」私は信じなかった。今は彼が正しかったと思う。当時、私は第2次大戦がイギリスに同じ運命をもたらすとは思っていなかった。

私は念のためにケレンスキーからロイド・ジョージに言うように言われていたことを正確に書き上げてあったので、話の途中で遮って、ポケットに持っていた短い文書を取り出して彼に渡した。彼は取り急ぎそれを読んで私に返して寄こした。「そんなことはできない」と彼は言った。議論するのは私の仕事ではなかった。「ケレンスキーに何と言えばいいですか？」と私は尋ねた。「そんなことはできない、とだけ」と彼は繰り返した。私は話をしようとしたが、彼は立ち上がって言った。「残念だが、この話は終わりにしなければならない。閣議があるので行かなければならないのだ」彼は私と温かく握手して、もう一度、私に会えてどんなに嬉しかったかと言った。

ホテルに戻って、私は次にどうすべきか考えた。ロシアに戻るしかないと思ったが、一両日はその準備をする必要もないだろうと思った。私は全く気分がよくなっておらず、咳き込んでいて、体温は標準をかなり超えていた。私はセント・トーマス病院に行って、秘書に肺の専門医の名前を教えてくれと言った。専門医は私を診察して、どうなっているか教えてくれたが、私にはとっくに分かっていた。「サナトリウムがあなたのいるべき場所ですよ」と彼は陽気に言った。そう言うのは大変結構だが、私はペトログラードに戻らなければならなかった。その後、ボルシェビキ派が権力を握って、ケレンスキーは倒されたというニュースが入ってきた。それで決まった。

私はロンドンでぶらぶらしていた。ある日、私はある時間にダウニング街10番地に来いという召喚状を受け取った。私が行くと、大勢の男が長いテーブルの両側に座っている部屋に連れて行かれた。彼らはかなりの重要人物らしかった。議長席に着いているルーファス・アイザック（1860～1935、イギリスの政治家）は見覚えがあったが、ウィリー・ワイズマン以外は誰も知らなかった。私はウィリーはまだアメリカにいたと思っていたので、彼を見て驚いた。私はお粗末ながらロシアでの活動について書いた報告書を読むようにと言われた。私は緊張していてどもるのが怖かったので、ウィリーに代わりに読

んでくれと頼んだ。彼が読み終わると、間があってから、私を召還した理由が明らかになった。ロシアには勝算がないので、ルーマニアを守るためにある計画が考えられていて、提案されたのは、私が行って、ロシアでやり損ねた難しい仕事をやるということだった。私は可能な限りの支援を受けられることが保証された。私は驚いた。この重要人物たちがまだ私を信頼しているらしいのが驚きだったが、私は彼らを失望させたくなかった。それに、その考えに私は興奮した。そうは言っても、体が言うことを聞かなくなるかもしれない訳だから、唯一適切なのは、自分が肺結核を患っていて、医者からサナトリウムに行くことを勧められているが、その仕事をするのもっと信頼できる人間が見つからなければ、必ずや喜んで危険を冒すということを行うことだと思った。ルーファス・アイザックは私を見た。彼はほほえんだ。「そういうことなら、あなたに行くのをお願いするべきではないと思います」と彼は言った。「サナトリウムに行ってください。早くよくなることを願っています」かすかに賛同のざわめきがあり、私は退出した。

2,3日後、私はスコットランド北部のバンチョリーに行った。そこには私が行くように勧められたサナトリウムがあって、即座に寝かされた。私はそこに数週間泊まった。春までにはかなり回復したので、医者たちは私が9月には戻るという了解のもとに夏の間サナトリウムを出ることに同意してくれた。それまでにイギリスに戻っていたシリーがバンチョリーまで私に会いに来て、私たちは夏の3か月の間ロンドンからあまり遠くない健康的な場所に家を借りることに決めた。彼女は望み通りのものを見つけ、私が合流した時には、娘と一緒に移り住んでいた。その家は広くて、大きな庭があった。私には仕事ができる素敵な書斎があった。その3か月の間に、私は長年心に温めていた小説を書き、『月と六ペンス』(*The Moon and Sixpence*, 1919)と名付けた。私たちは十分円満に生活した。ほんのたまに、誰かしら私の旧友が1泊で会いに来たが、シリーが歓迎しなかったもので、二度と来なかった。当時はある種の皮肉をもって眺めていたが、今となっては痛ましかった思うような状況が1つある。シリーが教育面で受け取っていたものはほんのわずかだったが、たまたまある出版社が、世間の人たちが自ら学べるような小冊子のシリーズを発行して大々的に宣伝したところだった。シリーはそれを買って2,3週間は朝ベッドの中で熱心に読みながら過ごしていたが、その後は飽きてきて捨ててしまった。

私たちは、私が次にサナトリウムに滞在した後、どこに落ち着くべきかについてたびたび話し合った。シリーは貸していたリージェンツ・パークの自分の家に住みたかったが、セルフリッジが彼女のために買った家に住むのは性に合わないのので、私はチェスタフィールド・ストリートの私の家に住もうと言い張った。私が長いこと留守をしていた間、私の家に住んでいた旧友のウォルター・ペインが引っ越して、8月の末には私たちの田舎の家の借用期間も終わった。9月と10月の間に私たちは引っ越して、それから私は北へ行くことになっていた。10月になると、ドイツの飛行機が4機、ロンドンの上空にやって来て爆弾を落とした。シリーが恐れおののいていたので、私は爆撃のことを忘れさせようと思い、彼女が家を改装することにどれだけ熱心か分かっていたから、彼女を階段のところまで連れて行き、その件についてのアイデアをいろいろと出した。後になって、彼女が友人たちに私の残忍性の例として彼女に殺される危険が迫っているのに私が無理やり階段にいさせたと言ったと聞いた時、私は嬉しいはずがなかった。10月の終わりに私はバンチョリーに行き、次の春に健康証明書を持ってロンドンに戻った。シリーはその間にリージェンツ・パークの自分の家を処分していた。しかしながら、私の家は不便なものになった。私は書斎を諦めてシリーに寝室として与え、執筆には通りに面している1階の小さな部屋を使

っていたので、しばらくしてチェスタフィールド・ストリートの家を売り、ウィンダム・プレイスに家を買った。私たちがそこに住んでいる間に、シリーは売買に対する隔世遺伝的な本能に動かされて、リージェンツ・パークの家以来まだ持っていた家具を使ってベーカー街で店を始めた。彼女は素晴らしいセンスを持っていて、店はすぐに成功した。彼女は、ロンドンのいろいろな競売場に行つては、がらくたを二束三文で手に入れ、それを売ってたんまり儲けるのが嬉しかったのだ。『月と六ペンス』は1919年に出版されて、好評を得た。アメリカではベストセラーになった。私は日記をつけたことがないので、思い出すのには記憶力に頼るしかない。事実は私が話す通りだが、年代の順番は疑わしい。『月と六ペンス』がいつ出版されたか正確に知るために、私は『紳士録』を調べなければならなかった。私が長いこと訪問したいと思っていた中国に行こうと決めたのは1920年だったと思う。もう一度大西洋を横断して、少しの間ニューヨークで過ごした後、私は極東に向けて出発した。ジェラルド・ハックストンを拾って一緒に行った。私は彼が死んだと思っていた。私がロシアに向けて出発すると、彼はジャワに仕事を心得、サンフランシスコから船で出航したが、その後音沙汰がなかった。全乗組員もろとも沈んだと思われていた。実際のところは、船はドイツの武装船ウルフに拿捕されて、積み荷、乗組員、乗客はその武装船に乗せられ、それから沈んだのだ。乗組員と乗客は最終的にドイツに連れて行かれ、そこで戦争捕虜として収容された。戦争が終わるまで、私たちは彼らが活着していることを知らなかった。タヒチへの旅で、私はジェラルドが非常に役に立つと気づいていた。どもりのせいで、今この年になってもそうだが、私は内気なことに苦しみながら、それを克服できないでいた。船の旅では、それがどんなに長かろうと、初めに話しかけられなければ、こちらからは誰にも話しかけようとしてこなかった。ジェラルドには生命力と機嫌の良さが備わっていて、航海に出て24時間と経たないうちに船内のすべての人たちと知り合いになった。彼がいなければ、私は南太平洋への旅行で材料を得られず、後に『一葉の震え』(*The Trembling of a Leaf*, 1921) という1冊の本にして出版した短編の数々を書けなかっただろう。私は20年の間、短編小説というものを書いていなかった。ここで言っている短編小説を私は気楽に楽しんで書いた。短編小説というのは、私にぴったり合った形式のようだ。私はずっと何らかの形で旅をしてきたが、旅をするのは私が落ち着かない性格で楽しいからだった。今回、私が旅を始めるのは、心の奥で役立ちそうな材料が見つかるかもしれないと思うからだった。中国は一つの楽しみだった。私はメモを取って、最終的に『中国の屏風』(*On a Chinese Screen*, 1922) という小さな本を出版した。それ以来ずっと、私は毎年のようにジェラルドを同行者として旅に出掛けた。オーストラリアに行ったのは、シドニーで起きる部分がある小説『人生の片隅で』(*The Narrow Corner*, 1932) のことが心にあったからで、私はずっと自分の小説の中の出来事の舞台を自分で見るのが好きだった。私は一冬をグアテマラ、メキシコ、キューバで過ごし、それぞれの場所で小説をいくつか書いた。

これらの長い旅で、5か月経つたらもはや頭に焼きついたイメージを自分のものにできないと分かっていたので、私はイギリスに戻った。ジェラルドはフランスとイタリアに行き、私が再び必要とするまでそこで友人たちのところに泊まった。シリーの商売は大繁盛したので、ベーカー街の店を手放してグロブナースクエアの角のデューク・ストリートに広い敷地を借りることができた。彼女は大評判になって、イギリスのみならずアメリカでも家の装飾で手数料をもらうようになり、仕事を果たすために時々ニューヨークにも行くようになった。彼女には素晴らしいセンスがあるだけでなく、機に聡かった。ある時、彼女はサンドゲイトの家を白で統一していたフィリップソン夫人とかいう人に会いに連れて行かれた。シリーはその目新しさが楽しいと思って、フィリップソン夫人が少々困ろうと、さらに家を白い壁、

白いカーテン、白いカーペット、白いソファ、白い肘掛け椅子で飾り始めた。しばらくの間、これがイギリスとアメリカの両方で大流行になったのだが、白は汚くなってまた家を改装しなければならなくなることに世間が気づいてその流行はやっと終わった。私は彼女の行動にははらはらさせられることがあった。彼女は顧客との取引で決して良心的ではなかった。私は彼女が問題を起こすのではないかと思ったが、これからどんなことが知れ渡るのか想像できなかった。心配する必要はなかった。シリーは賢明で、弁護士の手紙を受け取ると、受け取った金を返して、骨董品として売った模造品を取り戻すのが常だった。ある時は、危機一髪で起訴を逃れた。中国から戻ると、私は彼女にひすいの長いネックレスを買った。それは美しいものだったから、予想通り彼女は満足だった。彼女はそれに多額の保険を掛けた。彼女は装飾を施す家のための材料をパリに買いに行くことにしていたのだが、ある晩ロンドンに帰って来るなり言った。「どう言ったらいいのかしら、私、本当に気が狂いそうなの」「どうしたの？」と私は尋ねた。彼女は涙にむせんでいた。「ひすいのネックレスをなくしたの。つけてたのに。服に合うものを見つけるために、ルーブル美術館にいたんだけど、その場所は混んでいて、気がついたらネックレスがなかったのよ。ひどく忙しかった時に、泥棒がどうにかして私の首から外したとしか思えないわ」「残念だね」と私は言った。また、そのネックレスは美しく素晴らしいものだったから、それは本心だった。「幸いなことに、君はあれに保険を掛けてある」と私は言った。保険業界の連中は全額払った。1年ほど経って、保険会社の社員の1人がパリにいて、たまたまペ通りをぶらぶらしていた。彼は立ち止まって宝石店のウインドーを見た。まず彼の目に入ったものは、美しく陳列されていたからだが、ひすいのネックレスだった。彼は入って行き、販売員にどうやって手に入れたか尋ねた。マダム・モームから買ったと言われた。このために、シリーは刑務所に行ったかもしれないが、幸いなことに、保険業界の連中は、恐らくは社交界の女の詐欺に慣れていなくて、聞き分けがよかった。彼らは、保険金とわずかな額の訴訟費用を返せば、更なる処置は取らないことに同意したのだ。

私たちはウィンダム・プレイスに数年間住んでいた。私がロンドンにいる時は、文学界の友人たちに向けてささやかな夕食会を開いたものだった。私は楽しかったし、客たちもそうだったろうと思う。だがシリーは退屈で、食事が終わるとこっそり抜け出して、夜のその後の時間はお気に入りの友人たちと過ごすのが常だった。1921年に上演した『ひとめぐり』(*The Circle*)は多くの人に私の最高の芝居だと思われている。ある晩、シリーと私が二人だけで過ごしていると、彼女がこう言ったので驚いた。「世間では『ひとめぐり』があなたの最高の芝居だと言っているのはおかしいわ。あなたがあれを書いている間、私はあなたにあまり親切じゃなかったもの」実際その通りだった。彼女は私とひと悶着起こして、それが朝の2時とか3時まで続くのが常で、私は疲れ切ってベッドに行き、朝起きては面白い会話を書いたのだった。シリーがもっとたびたび口にする不満の1つは、私に対して影響力を全く持ち合わせていないことだった。私が知る限り、私に対して何か特別な影響力を持っている人なんかいないと断言しても無駄だった。彼女は聞く耳を持たなかった。「バーバラでさえ」と、私の20年来の友人の名前を挙げながら、彼女は言った。「私よりはあなたに対して影響力があるわ」それは違うと言って彼女を説得することはできなかった。私には重大とも思えない事柄を、彼女がどうしてそんなに気にするのか不思議だったが、やがてちょっとした説明になりそうなことを思いついた。シリーの女友達には、囲われの身だろうと、自分と結婚できないか結婚する気がない男に長年惹かれていた女だろうと、常に不安な気持ちがつきまっていた。男というのは移り気だ。大事な局面になった時、男がやりたくないことをやるように説得できる影響力を持ち続ける限り、女は安心なのだ。その上、持っている影響力は、簡単に言

いくるめることができるという、男を見下すようなちょっと楽しい気持ちと入り混じって、自分には力があるという快感を女に与える。だが、これは推測の域を出ず、あえて言うならば、あまり信憑性はない。

最近、私がシリー宛に書いた手紙の下書きが見つかったので、ここに載せるとしよう。いつ、どこから出したのかは分からない。私の手紙の基になるシリーの手紙についても何も思い出せない。私の手紙は実にひどい書き方だ。みじめな気持ちで苛立ちながらもオブラートに包んで書いている。清書したものがぞんざいな書き方ではなく、句読点が正しく打たれていることを望むばかりだ。いくつかの言い方は和らげたかもしれない。次のようなものだった。

親愛なるシリー

君の手紙を注意深く3回読んで 僕はこういう手紙には答えないと君が言うから 君を苦しめるのが怖いから答えるのを躊躇したが この手紙には答えた方がいいと思う、でも正直に書かないと書くこと自体が馬鹿らしくなってしまう、それに君は話すとすぐに泣いてしまうし 君が泣いている姿を見るのは辛くて正直に言えないので やっぱり書くのが一番なのかもしれない。僕は人を苦しめるのは嫌だからそういうことには憶病になるので かつてはそのために君に純然たる真実を指摘するのを控えたことがたびたびあったのは自覚しているけど、もし無理にでも君を面と向かわせていれば 僕たち二人の幸せのためにはその方がよかっただろうと思う。だから今もし僕が君を傷つけるようなことを言ったら それは悩みに悩んでのことだと思ってもらいたい。

どこから始めればいいのか分かりかねるが、非常にはっきりしているのは、僕たちが結婚して以来、二人ともあまり幸せだったことはなかった。二人とも幸せを望んで努力し最善を尽くしたが、その結果、仲違いの限界まで到達してしまったけど、君同様僕もこのまま放っておく訳にはいかないと思う。君は帰って来たくないと言うし、僕の方も正直言うと沈んだ気持ちでパリから戻った。僕が受けるべきはどんな非難なのか、どんな嫌がらせや苦情なのか分からなかった。だって、僕に関する限り、苦情という空気の中で生きているみたいだけど、それに慣れることはなかったし、もっともだとも思えないからだ。僕が心の中でこう考えたとしても、君は驚いてはいけない。どうして僕がこんな面倒なことや苦痛に耐えなければいけないのか？ 過去に戻りたくはないが、僕たちが結婚した時の状況を君が忘れてしまったはずはない。夫から敬意や好意、優しさや愛情を受けているなら、君はこの状況で大いに満足すべきだと思う。でも、実際に情熱的な愛を期待してはいけない。当時僕が自分の置かれている立場をどう思っていたか、君が正確に理解したことがないのを残念に思う。僕たちがその問題に取り掛かると、いつだって君は感情的になるから、僕は率直に話すことができなかった。僕は一瞬たりともこんなことになるとは予想もしない立場に置かれてしまったと感じた。全く馬鹿なことをしたものだと思っていたが、完全にこけにされたとも思った。君が僕を愛しているのは知っていたが、君が僕を愛するのは僕のためというよりもむしろ君自身のためだと感じた。君は僕の関心事や僕の利益や僕の幸福に少々無頓着だったのかもしれない。君はずっと、自分が望むものを世間が望まないと、世間から虐待されているのだと決めてかかって生きて行動してきたのだから、こう言ったら怒るかもしれないが、信じてくれ、君を怒らせるためではなく、僕にはそう思えるから言うのだ。僕が君と結婚したのは、君が僕を愛していて、僕には褒めるところがあまり見当たらない人生で、君が何の罪もないことで苦しむと思うと耐えら

れなかったからだ。僕が君と結婚したのは、自分の愚かさとかわがままの償いをする覚悟を決めたからだし、僕が君と結婚したのは、君の満足とエリザベスの幸せな生活のためにはそれが最善だと思ったからであって、君を愛していたから結婚した訳ではないけど、君もそのことはよく知っていたはずだ。何で今更、君を愛していないと非難することで僕を苦しめなければならないのだろうか？ 君が僕と結婚した時、事情は承知の上で君は受け入れた——悔やんでも悔やみきれないことだが、本当だ、君を愛せればいいのにと心の底から思う——それなのに、君はまるで僕がわざと君を傷つけたかのように僕を扱う。こういう状況の中で、君は最初に僕を感じないくらい束縛を緩くしようと考えたべきだった。君は多くを要求するべきじゃなかったと思う。僕が君のためにしたこと、正直言って、僕は実にたくさんのことをしたけど、それを全部感謝しながら受け入れて、僕が快く与えられるもの以外は何も要求しなければ、君は気が利いていたと思う。でも、君のやり方はそうではなかった。あの頃のことを思い返すと、絶えず求め続けて、決して、絶対に満足しない女を思い出す。僕が君のためにすることを全部、君は自分の権利と見なして、跳躍台として利用し、それ以上のものを要求した。僕は君のためにできることは全部やったから、君の望むことができない時に、耐えがたいひどいことを言われるのは理不尽だと思った。君は僕の愛情を望み、僕は君に愛情を与えた——君はどれだけのものか分かっていないけど——でも、君はできるだけそれをつぶしたみたいだ。今まで、君が僕に言ったようなことを僕に言った人はいなかったのを知っているかな？ 君がしたみたいに、僕に苦情を言ったり、小言を言ったり、苦しめた人はいまだかつていなかった。どうして君に対する愛情を保てるというのだろうか？ 君は僕を恐怖に陥れた。46歳にもなるのに、僕がカクテルの1杯でもひっかけなければ君と顔を合わせるができないようなことが何度もあったことを考えてもみてくれ。ねえ君、君と結婚した時、僕は43歳だった。あんなふうに使われるには年を取り過ぎていた。僕は繊細過ぎるんだ。君はずっとお互いにひどいことを言い合うような連中の中で生きてきたけど、僕はそうじゃない。そういうのは僕にとって屈辱だ。みじめな気持ちになる。君は僕にもっと話してほしいと不満を言うが、君は会話で僕の楽しみを台なしにするんだ。君は常に僕がうっかり言ったことの中に自分へのあてこすりを探して騒ぐから、誤解のもとになるようなことは言わないように細心の注意を払うことを学んだ。やっとなら、君に話せと言われてもほとんどワンピースと家具のことしか話さないまでになった。だけど、僕がこの2つの話題にどれだけうんざりするか、君が分かっているのかどうか。僕がパーティーに行った時は、僕の言ったことが君のところまで回って、君の感情を害するものだとか曲解するといけなから、細心の注意を払って自分の言葉に気をつけなければならない。僕が行く気にならないのが不思議じゃないのか？ ねえ君、こういうふうに君が自分のことしか考えないことは、君にとっても、君に関わるすべての人にとっても、何という拷問なのだろう。君は僕が長旅をするのに腹を立てる。君は、最初の夫が長旅に連れて行った時、死ぬほど退屈したというのに、長旅ほど望んでいるものはないと言い、一人暮らしをしていた頃は、タンジールのブレイク夫妻に会うために旅をした以外、ロンドン、パリ、ビアリッツ、リヴィエラをぐるっと回るだけだった。あえて言えば、君の長旅に出たいという気持ちは本心からということでもないのだ。君と一緒に旅行していて楽しいから、もし僕が世界観光の旅行者として行くなら、喜んで君を連れて行くけど、僕が行くのは特別な目的があって、しばしば女が行くには無理な環境の場所に行くというのに、あいにく君は僕と僕が集中している考えの間に割り込んでくる。僕はアイデアを得るために行くのに、君と一緒にだと何も得られない。申し訳ないとは思いますが、それがまぎれもない事実だ。君は、君の言葉を借りれば、僕が君を僕の人生に立ち入らせないことも憤慨して、君は僕が君を排除しているように感じると言う。君がそういう気持ちになったのなら本当に申し訳ないが、僕たちが結婚した時、僕が43歳

だったことを忘れてはいけない。僕は高度な専門性を持ち、ある種の仕事に向けて訓練されていたから、自分を変えようと努力することはできなかった。君だってあまり若くはなかったし、違う方面にしろ専門性も持っていた。僕が君は快樂を専門にしていたと言っても、あんまりだと思わないでくれ。君が僕の人生に入り込もうとしたのは、マドレーヌ.W がアーサー・コーエンと暮らせば審美眼を身に着けられると思ったのと同じで、芸術的、文学的になりたいと願うだけでいいと思ったんだ。それはそれほど簡単なことではない。君には大事なもの、心や精神の問題に対して関心がないから、みせかけだけで誰も騙されなかった。かわいそうなシリー、みんなが本のことを話している、君が独特の口調で「何て素晴らしいの」と言う時、君は本当に、自分にとって意味のある言葉を使っていることが分かっただけだと思っただろうか？ 僕としては、君にいろいろなことに興味を持ってもらおうと精一杯頑張ってきた。カードのゲームにしても、君は全く関心がなかった。本にしても、君が読むのはその時に話す相手がない時だけだ。編み物だって同じことだ。君が愛情からスカーフを作ることで、それが習慣になって君を休ませて緊張を和らげるだろうと思ひ、君のためにウールと針を買ったことを僕は覚えている。2,3週間その考えをもてあそんだ挙句、君は僕にスカーフを買った。君がセント・ダンスタズ（盲目の元イギリス軍人を支援する慈善団体）で働くと言い出した時、僕はどれだけ強く君にそうしてもらいたかったか覚えている。君はそうはしたが、ほんの、ほんのちょっとで飽きてしまった。君には自分自身の資質というものが全くないんだよ。悲劇的なことだと思う。本当に気の毒だが、僕にはどうしようもない。君の人生に対する態度は、男が腕を差し出した時のすがり方に表われていると僕は何度も思った。大抵の女は男の腕に手を置くだけで、その仕草は感じのいい親しげなものだが、君は男に全体重を投げかけるものだから、しばらくすると男は疲れてきて離れるんだ。君には自分自身の資質というものが全くないから、僕の資質を自分のものとして取り入れたがるが、そんなことができるだろうか？ 無理だ。言っておくけど、僕が芸術や文学について君に反対意見を持たないのは、君がそういうものにあまり知的な興味を持っていないからだ。優秀で立派な人たちも多くはそうだから、それを要求するのは全くのおごりというものだが、好きな人生を送って、その人生で成功者になってはどうだろうか？ 君はパーティーとある種の人たちが好きだ、それなら、いいのではないか？ 君は好きな道を行って慣れている生活を送り、僕にも慣れている生活を送るのがどうしていけないのだろうか？ これを持たなければいけない、あれを持たなければいけないと君は絶えず言い続けているが、自分から何かを差し出そうと考えたことがあるのだろうか？ 男は妻に何を求める権利があるのか、君が与えるものはいかに少ないか、君は考えたことがあるのだろうかと思う。要点を言うと、君がすることと言えば、美しい服に身を包んではこれといって何もしないで目立っているだけのことだ。大したことないよね？ 君は僕に愛情を与えてくれるけど、常に見返りを求める。君は愛情を商品として扱い、それにふさわしい代償を手にしようと決めている。僕が君の愛に感謝していないとか、君の親切に気づいていないとは思わないでほしい。そういうのはこのような手紙の一番いけないところだ。何かをこきおろすということは、それだけですべてをゆがめることになる。それに、君が僕の愛情を信じていいのは確かだ。2,3週間前、君がル・テュケ（イギリス海峡に面したフランスの観光地）に行く前、僕の愛情が大したものではなかったとしても、僕を引き止めるものは君への愛情しかなかった。信じてくれ、あの時ほど自殺しそうになったことはなかった。僕は、自分の年、自分の状況で自分と同じようなみじめな思いをするような男は愚か者であって同情に値しないと思い込んだ。あの時僕が君に何を言ったか知っている。僕は本気だった。今や、僕たちには2つの道しか開かれていない。自分が好きな時に、好きな期間、好きな回数、安心して、醜態をさらすこともなく行ったり来たりする自由を求めて僕があの時した要求を、君

は受け入れなければいけない。さもなければ別居だ。実際、僕は不幸や醜態や不満を抱えた人生を生きられるほど強くないし、肉体的にも強くないから、死ぬしかない。エリザベスのことについてはほとんど何も言っていないが、いかに絶えず彼女のことを考えているか、ここ何年も彼女のためにいかに多くのことをしたか、君は知っている。君のため、僕のためと同じように、彼女のために、君が喜んで妥協する気にさえなれるのなら、みんなで一緒に暮らし続けたい。

シリーが私の手紙に答えたか覚えていない。私たちは一緒に生活を続けた。彼女はすでに社会的名声を手に入れ始めていて、もはや私たちがウィンダム・プレイスに持っていた家に満足していなかった。彼女に説得されて、私はそこを売り、代わりにブライアンストン・スクエアの大きくて立派な家を買った。私たちは何度もパーティーを開き、何度もパーティーに行った。どのパーティーも楽しげではあったが、私の好みにはあまり合わなかった。大成功だったので特に1つだけ覚えているが、それがシリーの後の計画に影響を与えた。女主人は美しい女で、もう若くはなく、過ごしてきたのは波乱万丈の人生ではあったが、身に着けているパールやダイヤモンドから分かるように、裕福な過去だった。ほかの女たちは若くてかわいかった。男たちには2種類あって、中年もしくは初老の恰幅のいい温厚な——甘いパパさんたちと、もっと若くてすらっとした背の高い洗練された株式仲買人や元近衛兵たちで、彼らはそこで安上がりになんか楽しむことを期待していた。いかがわしい貴族もいて、世襲財産を浪費してしまい、伯爵夫人にしてもらって代わりに彼の借金を払う用意のある貴婦人のような女を探していた。私にはおしゃべりの才能がなかった。水から出た魚だった。私はやるべき仕事があったので、真夜中にそっと抜け出し、シリーを残して未明に帰宅した。

ある日、彼女が不意に私に言った。「もしあなたが私と離婚しても、私から子供を離そうとはしないわよね？」彼女は愛人がいることをこれ以上はないくらいはっきり言った。すでに、彼女の親友の1人からそのことを聞かされていたので、私は驚かなかった。実際は、1人ではなく2人いた。私は2人とも知っていて、どちらにも批判的だった。どちらも長続きしなかった。この頃には、シリーも装飾家として大金を稼いでいたので、ル・テュケに1区画の土地を買って家を建てることができて、いつものいいセンスで家具を備えた。当時のル・テュケは、イギリスからのアクセスが簡単だったので、カジノにゴルフ場と、大層流行ってきていた。そこに家を持つことは社交上有利だった。シリーのアメリカ人の顧客は彼女が長期間合衆国で過ごすことを余儀なくした。そういうある時、私が極東から戻る途中、ロンドンへの到着を知らせるために余裕をもってシリーに手紙を出しておいたのだが、船がマルセイユに着いて受け取ったシリーの秘書からの手紙には、シリーがブライアンストン・スクエアの家を貸していて、借家人たちは2週間出ていかないとあった。私は初めてホームレスになった。私はバンコックで死にかけの原因になったマラリアの再発で帰路の一番いい時をベッドで過ごしてきたのだった。私は行くところがなく、回復するためにエクス・アン・プロバンス（フランス南東部の古都）に行った。ル・テュケの家はシリーの財産で、私は客として行った。私は自分の家を持ったら楽しいだろうと思いつき、それを思いつくとすぐに実行に移すことを決めた。その時点でできることはなかったから、シリーがイギリスに戻ると、私は合流した。1年と経たないうちに、私はまた何もすることがなくなり、自分に合うものがあるかどうか確かめるためにリヴィエラに行った。周旋屋たちが次から次と家を見せてくれたが、気に入るものはなかった。とうとうやけを起こして、彼らは私をフェラ岬の家を見に連れて行ったのだが、それは住むことができるようにする費用に購入希望者が尻込みして、長い間空き家になっていたの

だ。

ベルギー王レオポルド2世は非常に商売に長けた人だった。彼はフェラ岬全体を、噂では40,000ポンドで買った。彼は自分自身に大きな公園の中に宮殿のような邸宅を、3人の愛人のために3つの家を建てた——大きい家は1番目の愛人用、小さめの家は2番目の愛人用、もっと小さな家は3番目の愛人用だった。彼は非常に迷信深い人で、僧侶の手から臨終の時に聖油を塗る聖餐を受けずに死ぬ可能性があることをひどく恐れていた。彼は、かつてはフランス領アフリカのラビジェリー枢機卿の司教補で、今は引退している年配の聖職者の司教を雇った。王は司教にかなり広い土地を与え、緊急の場合は5分以内に馬車で来ることができて、王が神と仲直りしながら安らかに死ぬるようにと、自分の邸宅の近くに家を建てるための資金も与えた。司教は人生の大部分をアルジェリアで過ごしてきたので、ムーア式の家を建てた。馬蹄形の窓、中庭には馬蹄形の柱廊、客間には馬蹄形の柱、屋根には大きな頂塔があり、いささか妙な具合に趣味を逸脱しているが、家の海に面した側には巨大なルネサンス様式の玄関先柱廊があった。私は、これらの実にひどいものはすべて木摺としかいだけなので、解体して捨てれば普通の四角い家が持てることが分かった。私は提案し、その提案は受け入れられた。私は必要書類にサインし、芝居を上演する予定のアメリカに向けて発つ直前に金を払った。私がやったことをシリーに話すと、彼女は私の知らせを冷ややかに無言で受け取った。

ロンドンに戻ると、私は望み通りにするべく家を建築家の手に委ねた。この時には、シリーはブライアンストン・スクエアの家では満足できなくなっていた。彼女は年が経過するにつれて社交界の友人との交際範囲を広げていて、ブライアンストン・スクエアの家は彼女が開きたいパーティーに向いていなかった。彼女はチェルシーのキングス・ロードに家を見つけたのだが、それにはグリーブ・プレイスの小さな家の角を曲がったところに付属物がついていた。彼女は私に、ブライアンストン・スクエアの家を売って、その金で自分がその2つの物件を買って1つにできるようにしてくれないかと言った。私が承諾するやいなや、彼女はブライアンストン・スクエアの家の買い手を見つけた。私は、きれいだからではなく、使い慣れているから好きな寝室の家具、本、長年集めてきた舞台写真、旅行で買ったいろいろな美術品を持って行ってもいいことを条件にした。私はこれらの所有物を全部フェラ岬に送り、やがてシリーは新しい家に引っ越した。私はそこで春を過ごした。私は、十分立派だが「紳士用クローク」にもなるという欠点のある最上階の部屋を割り当てられていたので、パーティーがあると、執筆中のものを全部片づけなければならなかった。シリーは、仕事場として私が小さなフラットを借り、彼女が模様替えをすれば、私も安心して執筆できるだろうと提案した。私はそのアイデアは気に入らなかった。いつもの発想で、彼女は何とかスペースを思いのままにアレンジして広々としたダンス場を作っていた。新築披露パーティーとして、彼女は満員になるようなダンスパーティーを開いた。大成功だった。シリーは見事な女主人ぶりで、愛想よく、生き生きとして魅力的だった。用意周到で、誰もが楽しんだ。シリーは大得意だった。社交シーズンが終わると、彼女はル・テュケに行き、私はリヴィエラに行った。私たちは友好的な関係のまま別れた。私の家はやるべきことが山積みで、まだ職人たちは忙しくしていたが、住むことはできた。2,3週間後、シリーがアンティープ（フランス南東部のコート・ダジュール海岸にある保養地）で旧友のエルシー・メンドルのところに泊まっていると聞くと、私は昼食に来て家を見ないかと誘った。彼女は返事を寄こし、喜んで行くと言って日にち指定した。車を迎えにやった。私たちは差し向かいで昼食を取り、昼食後、私は彼女を敷地内に連れて行った。彼女の鑑識眼は適切だ

った。彼女は見るべきものをすべて見てしまうと、アンティープに帰らなければいけないと言うので、私は彼女を車に乗せた。1, 2 時間後、車は彼女からのメモを持って戻って来た。その中で、彼女は私と離婚したい、妨げないでほしいと言っていた。私は驚いた。私はその問題を 1 日じっくり考えて、手紙を出して彼女がフランスでの離婚に満足なら望み通りにしようと言った。こう書いたのは、フランスで離婚するは簡単で、離婚に伴う告知の必要がないからだ。シリーは同意し、弁護士たちが動き出した。私はそれまで彼女に年 3,000 ポンド与えていたが、彼女は家賃なしで暮らしていたから、室内装飾家として稼ぐ金がなかったとしても、それで十分快適に暮らせた。今回、彼女に年 2,400 ポンドと決めたが、それはヘンリー・ウェルカムが離婚の際に与えたものだった。娘には年 600 ポンドと決めた。さらに、私は彼女に十分に家具の備わったキングス・ロードの家とロールスロイスをやったから、彼女もそれほど悪くはなかった。離婚は無事に成立した。シリーは盛大なパーティーを開き続けた。彼女のダンスパーティーは大人気で、多くの人たちがロンドンで開かれる中で最高のものだった。招待状は引っぱりだこだった。実際、ある時、大西洋を横断する旅行で私がブリッジの初歩を教えていたケント公爵から、どうして招待してくれないのかと尋ねられたことがあった。招待するのは自分の権限ではないと言うのは分別がないと思った。

それ以降、シリーと会ったのは 4, 5 回で、仕事の打ち合わせや、2 人で出席しなければならない行事がある時だけだった。彼女はしばらくしてキングス・ロードの家を売り、よりハイクラスの地区に 1 軒、また 1 軒と買ったり借りたりした。彼女はル・テュケの家を売ってかなりの利益を得たと思う。晩年はパーク・レーンのフラットで過ごした。彼女は 70 代後半で亡くなり、グローブナー・チャペルで追悼式が行われた。

第3部
(*Show*, August, 1962)



ある日、他の2,3人の作家との昼食会で、私はエドワード・キャロウェイの隣に座っていたのだが、やがて会話は彼がこれから取り組もうとしている文学作品の話になった。それが何であったかは忘れてしまったが、尋常ではないほど難しいと感じたことだけは覚えている。「それにはいささか努力が必要でしょう」と私は言った。エドワードは私に見下したような笑顔を見せた。「私は自分の才能に十分な自信を持っているので、できると思います」と彼は言った。私は思わず椅子から転げ落ちそうになった。私は長年彼を知っていたが、彼に才能があるとは思ってもみなかった。それどころか、私は非常に驚いて、彼が日常語ではない言葉に何らかの意味を持たせているに違いないと考えた。それで、その機会があった時に、オックスフォード辞典で調べてみた。才能の定義や説明には2段半が割かれている。私はそれを熟読し、最終的に辿り着いたものに満足して調べ終えた。それではっきりしたのは、エドワードが自分の才能を淡々と語る時は、彼がO.E.D.でいうところの「優れた精神力」を持っていると自覚していることを意味しているということだった。

エドワード・キャロウェイは上流中産階級の一員であり、僭越ながら私自身もその階級に属している。誰かがその栄枯盛衰を論じた論文を書いてくれればよいと思う。面白いものになるだろう。上流中産階級は18世紀中頃から19世紀中頃まで続いた産業革命に伴って発生したと思われる。産業革命はそれまで農業中心だったイギリスの安定した社会を近代工業主義に変えた。何の後ろ盾もなく、ほとんど教育も受けていないが、知恵だけはある賢い若者たちが、巨額の財産を築き、政治的な貢献や気前のいい慈善活動によって、最終的には貴族の地位を与えられ、その子孫が貴族に嫁ぐようになった。劣った部類の若者たちは小さな店から始めて、商人として成功した。また、雑用係から始めて、やがて実業家として成功し、息子を優秀な学校に通わせた連中もいた。当時は、紳士になるのには3代かかると言われていた。彼らがこの望ましい地位に到達する頃には、働かずとも自分の収入で快適な生活を送ることがで

きるようになり、尊敬される階級の一員として貧しい地主階級にも対等に受け入れられた。

エドワード・キャロウェイは一人っ子で、イングランド南部のパブリック・スクールに通わせられたのだが、そのパブリック・スクールはその子にも両親にも名声こそ与えなかったが、優れた教育を受けた。彼はひどい近視で眼鏡をかけなければならず、運動には向いていなかったが、勤勉で記憶力が良かった。18歳の時、奨学金を得てオックスフォードに進学した。知的な人間として、彼は知識人のグループに入って楽しんだ。友人たちが期待したように主席ではなく第2位として学位を取った時、彼は将来の不安に直面した。所得税、相続税、無分別な投機のせいで、家族の財産を成した人が豊かだと思っていたものが、今ではすっかり失われてしまったので、エドワードは、賢明にも、慣れているスタイルで生活するためには、何か稼げる仕事を見つけなければならないと決断した。不幸だったのは、彼が古典の知識と文学への愛以外に、何も持っていなかったことだ。

もし彼があと50年早く生まれていたら、彼の進路は明白だっただろう。彼なら聖職に就いていただろう。風格があり、よく響く声をしていて、副牧師として、対処しなければならないやっかいな労働者階級のいない快適な場所で15年かそこら過ごした後、カンタベリーかオックスフォード近辺での生活を手にしていただろう。愛想よく世間話をする才能を使って、彼はその文化の中心地の女性たちのお茶会で大人気となり、最終的には、大司教とまではいなくても、少なくとも地方司祭として、幸せで安楽な人生をまっとうしたことだろう。だが、イギリスの歴史のこの時期、教会は大して財産のない知的な若者を惹きつける職業ではなかったので、エドワード・キャロウェイは紳士が就いてもおかしくない職業を考えようと心に決めた。あいにく、そういう職業は長期の訓練が必要だった。事務弁護士になるには実務修習生にならなければならない、法廷弁護士になるには法学院会食に出て（法廷弁護士になる資格の1つとして毎学期少なくとも3回は会食する必要があることから、法廷弁護士になる修業をすることを意味する）難しい試験に通らなければならない、医者になるには医学生として5年間過ごさなければならなかった。訓練の必要がなく、試験なしに就けて、信望があり同等の人たちの仲間になれる仕事が1つだけあった。エドワード・キャロウェイは作家になろうと決めた。

彼は大学の指導教員からインテリ向きの週刊誌の編集者に宛てた紹介状をもらった。彼がロンドンに行ってその編集者に会うと、編集者は試しに本を2,3冊渡して批評させた。その結果が満足のいくものだったので、彼は次から次と本を渡されて批評した。それは彼にぴったりの仕事だった。彼には想像力もユーモアもなく、文学作品を作ることを職業にしようとする者にしては少々欠点もあったが、彼はまともな英語を書き、良心的な人だった。彼は優良なクラブに入り、アテナイオン（文芸研究会）の入会者として名前が載った。その頃、社交界が文学に興味を持ち始めたことは幸運だった。今世紀の初め、偉大な高貴な婦人たちは、スキャンダラスな離婚によってメイフェアから締め出された時しか文学に関心を持たなかった。だが、今私が書いている時代には、彼女たちは文学者が昼食の食卓で重要なものであることに気づいていた。エドワードは喜んで迎えられる客だった。イギリス人がおしゃべりだったためしはなかった。昼食会を開くつもりなら、客の中に、会話を中断させずに文学的な事柄について詳しく語ることでその会に文化的な雰囲気をも十分に与えられる人がいることは実に便利なことだった。エド

ワードは引っ張りだこだった。彼は広く知られるようになった。

彼は節操のある人で、友人の本は決して批評しないことを常としていたが、時々、ある高貴な婦人が回想録を出版しては彼に批評してくれと手紙を寄こした。彼女と昼食や晚餐を共にして、オペラで彼女のボックス席に座り、彼女の豪華な田舎屋敷で贅沢な週末を過ごした後、彼は何ができたろうか？彼は自らの主義を抑え込んだ。少なくとも1回は不愉快な思いをした。こういう状況の中で彼が批評するのに選んだ本は駄作だった。しかしながら、彼は何とかどんな職業作家でも満足するような批評を書いた。だが、素人というのは実に傷つきやすいもので、その婦人は彼に怒りの手紙を出して彼のことをひどい恩知らずだと非難した。彼女が最も激しく非難したのは、彼が彼女の本を完全に悪意から酷評したということだった。

だが、シットウェル家（イーディス、オスバート、サチェヴェルの3人兄弟で、1916年から1930年の間、ロンドンで自分たちを中心とした文学・芸術集団を形成していた）から痛烈な手紙が来たり、彼が本を酷評したアテナイオンの会友から冷たい目で見られたりという状況にもかかわらず、文学界におけるエドワードの重要性は増していった。出版業者たちは広告に彼の好意的な批評を引用し、批評の中で彼の名前は作家の2倍の大きさの文字で印刷された。彼は莫大な発行部数の新聞に寄稿し、多額の報酬を得た。他人の本を読むだけで満足で、彼自身は1冊も書かなかった。彼が読んだ本の数はとても数えきれない。何千冊にもなるだろう。彼は自らを文芸ジャーナリストと呼び、彼が書く新聞のほかの欄を埋める原稿を書いている新聞記者、芸能レポーター、インタビュアー、犯罪スペシャリスト、海外特派員より一枚上と見なしていた。彼はその点で間違いを犯したのかもしれないと思う。何にしても、彼らは人生を扱っていた。現実の人生について、彼は何も知らなかったし、無頓着だったと言わなければならぬまい。エドワード・キャロウェイはそういう人間だった。

わざわざ新聞を敵に回すような作家たちがいる。これは愚かなことだ。記者たちの生活は厳しく、給料もあまり高くない。彼らはどんな天気でも出掛けなければならず、長い退屈な旅をしなければならぬこともしょっちゅうある。彼らは会いに行く作家と同じように生活費を稼がなければならない。自分が思われるほどタフでないこともある。実際はちょっと神経質かもしれない。彼らをくつろがせるのが常識だ。飲み物を出して自分のことを少しばかり話すように仕向ければ、彼らもありがたがるだろう。思いがけない経験だっけするかもしれない。何年も前のある時、広く読まれている日刊紙のためにあるインタビュアーが私に会いに来て、落ち着いて話を始めると、彼は持って来たアタッシュ・ケースを軽く叩いて言った。「この中にあなたに関する情報がすべて入っています」私はインスピレーションが浮かんできた。「私の死亡記事はありますか？」と私は尋ねた。彼が驚いたような表情を見せたので、持っているのが分かった。「見せてください」と私は言った。「見せてくれたら、最高のインタビューにしますよ」「見せたことが知れたら、首になります」と彼は言った。「誰が知るといいますか？」と私は答えた。「あなたのことは漏らしませんよ」ちょっとためらってから、彼はアタッシュ・ケースに入っている書類を引っ掻き回して捜し、私に死亡記事を寄こした。それは活字になっていたから、1時間もあれば新聞に入れることができた。コラム欄の4分の3を占める記事で、まあまあ妥当だと思った。過去形で書

かれているのは変な気持ちだった。亡霊になったような気持ちがした。私は読み終わると、書類をジャーナリストに返した。「ご満足いただけましたか？」と彼は尋ねた。「概して間違っていない」と私は答えた。「少しばかり冷たい感じがする。書き手にはもう少し思いやりをもって考えを述べてもらいたかった」これに二人は思わず笑ってしまったが、インタビューを続けた。

それほど前のことではないが、別のインタビュアーが私の計画についていくつか会話した後、出し抜けに尋ねた。「あなたは無神論者なんですよ？」「私はむしろ自分を合理主義者と呼びたい」と私は答えた。「私が考えていたのは」と彼は始めた。「やめてくれ」と私は遮ったが、彼が何を言おうとしているか見当がついていたからだ。それは、人生が終わろうとしている今、私が不安を感じて、疑念を持って死後自分に起こることを見ているかもしれないということだった。彼は間違っていた。私は神の存在も靈魂の不滅も信じていない。神が存在しないことを証明するのは不可能だが、神が存在すると信ずるに足る理由がないことは、一般的に合理主義者も認めている。靈魂の不滅を信ずるに足る理由もない。私としては、どうしてそれでも世間の人たちが超越的な（宇宙や人間の存在を超えた）神や来世の存在を信じられるのか理解できない。私たちから何百万光波も離れたところに何百万もの銀河があり、拡大し続けている広大な宇宙のことを考えると、逆説的に思われるかもしれないが、その中に神の居場所があるという考えはほとんど抱けない。キリスト教は滅びつつある宗教だと思う。あと 200 年か 300 年は存続するかもしれないが、カトリックはプロテスタントの教会が放棄してしまった感情に訴える力があるからプロテスタントよりも長く存続すると思う。たとえ読唱ミサ（音楽なしのミサで司祭は祈りを歌わず読唱するミサ）にしろ、ミサに参列して、大量に刺繍のある法衣を着た司祭が侍祭（下級聖職者）を従えて速くて聞き取れないが祈祷書の決まった祈りの言葉を読むのを目にすると、どんなに凝り固まった無神論者も感動しない訳にはいかない。そして、侍祭が聖体奉挙（神に捧げるパンを高く掲げること）を先触れするために鈴をチリンチリンと鳴らして、会衆がひざまづくような時もそうだ。忠実な信者たちに対して全質変化（聖餐のパンとぶどう酒とをキリストの肉と血とに変化させること）の奇跡が起きて、執行司祭が礼拝する者みんなのために聖体と聖杯を次々と高く掲げる時、不信心者であったとしても畏怖の念を深く抱かない訳にはいかない。荘厳なミサの儀式と比べてプロテスタントの礼拝の何とうらさびしいことか！ だが、それでカトリック信者がプロテスタントと同じ運命を分かち合うのを妨げることににはならない。キリスト教は信じられない。私はこういう大司教や司教は本当に自分たちが説教することを信じているのかどうか自問する。彼らは普通以上の知性の持ち主なのだろう、そうでなければ、重要な地位まで上がれなかっただろう。彼らは本当に処女懐胎説、イエスが行ったとされている奇跡、キリストの奇跡を信じているのだろうか？

何年前、バートランド・ラッセル（1872～1970 イギリスの哲学者・論理学者・数学者・社会批評家・政治活動家）がある講演を行い、その後『なぜ私はキリスト教徒ではないか』という小さな本として出版した。私はラッセルを非常に称賛している。彼は数学者としても哲学者としても卓越している。その上、彼はまれなほど見事な英語を書く。私は『なぜ私はキリスト教徒ではないか』はつまらないと思った。ラッセルはイエスに公平でないと思う。「私に関心があるのは」と彼は書いている。「福音書の中に登場するキリストで、福音書はありのままを語っていると思っている」福音書は誰もがイエスとそ

の弟子たちについて知ることができる唯一の情報源だから、それはしごく当然だ。福音書が書かれたのはキリストのはりつけの数十年後だ。一般では、最初に書かれたのは聖マルコによる福音書だと言われており、後に書いたマタイとルカはその多くを利用している。マルコはイエスを知らなかった。彼はペテロの通訳だったと言われており、ペテロからローマで題材を手に入れたと思われる。彼が Q 資料として知られていて学者が共観福音書（マタイ・マルコ・ルカの三福音書）の出所だと考えているイエスの語録集を利用したのは間違いない。Q 資料が文字で書かれた文書なのか、改宗者を指導する時に使われた一連の口頭による教えなのかは分からない。イエスの弟子たちは教養のある人間ではなかった。彼らは大して知的ですらなかった。彼らはよく仲間内で争って、お互いに妬み合った。彼らの取り柄はイエスを愛していることだった。優れた知性をもっているバートランド・ラッセルが彼らの証言を、言わせてもらえば、絶対の真理として受け止めたのは奇妙だ。私はそれどころか彼らは実にあてにならないと思いたい。

今や、あらゆる小説家が、小説の人物にその人らしくない行動をさせることだけはやってはいけないと分かっている。作家がフィクションではなく、自分が事実であると主張するものを扱う時、この間違いを避けることがどれだけ必要だろうか。聖マルコの福音書には、イエスが弟子たちを 2 人ずつ遣わした時の様子を語る一節がある。「また、こうも言われた。どこでも家に入ったなら、そこから出発するまではそこに留まりなさい。誰かがあなた方を受け入れず、あなた方の言うことに耳を傾けないなら、そこから出発する時に、彼らに対する抗議のため、足の裏のちりを払い落としなさい。はっきりとあなた方に告げる。裁きの日には、ソドムとゴモラ（ソドムもゴモラも死海南岸にあった古代パレスティナの町で共に神に滅ぼされた）のほうがその町よりは耐えやすいだろう」この脅し方には驚かされる。家主には 2 人の弟子が要求したもてなしを断わってもいい理由があったかもしれない。家に病人がいたかもしれない。2 人の弟子を受け入れるための部屋も金もなかったかもしれない。家主は祖先の信仰に満足している敬虔なユダヤ人だったかもしれない。いずれにせよ、罰が罪に見合っていない。これは宣教師が食事と宿泊を確保するために考え出したものに違いないと私には思える。

バートランド・ラッセルはその小さな本の中でキリストの性格をけなしている。彼がキリストを非難する理由は、もしキリストが全知全能の神ならば重大な過ちだが、キリストがただの人間ならば単なる誤りであるようなことだ。もしただの人間なら、地獄の火の存在を信じていたことは性格の欠点ではない。それは当時の常識であり、キリストは地球が平らだと疑わなかったのと同様に少しもそれを疑わなかったはずだ。キリストが当時生きていた人々が死ぬ前に栄光の雲の中で自分の再臨が起こると思っていたのは確かだ。彼は間違っただけだが、それが性格の欠点ではないのは確かだ。さらに、ラッセルは自分の教えに耳を貸さない人たちに対するキリストの「猛烈な復讐心」にも衝撃を受けている。その「猛烈な復讐心」も、私には迫害に直面した福音伝道者のでっち上げに過ぎないように思える。そんなのはキリストらしくない。聖マルコが語る感動的な出来事にキリストの性格の美点が実にはっきりと表れている。「彼に触ってもらおうとして、人々は幼子たちを彼のもとに連れて来ていたが、弟子たちは、幼子たちを連れて来ていた者たちをしっかりとらせた。しかしイエスは、それを見て憤りに動かされ、彼らに言った、「幼子たちが私のところに来るままにしておきなさい！ 彼らをとどめてはいけない。神の王国はこのような者たちのものだからだ。……彼らを両腕に抱き寄せ、その上に両手を置いて彼らを祝福した」イエスは、福音伝道者の知るところよりも慈悲深く、情け深く、道理をわきまえた存在だったのだ。

彼は奇跡を信じていた。当時、奇跡を信じることは一般的だった。学識、行動、弁舌などで仲間に感銘を与えた人物、例えば、テュアナのアポロニオス（1世紀ギリシアの新ピュタゴラス学派の哲学者）のような人物は皆、奇跡を起こす力を持っていると信じられていた。そういう力を持っていることは、神から呼びかけられるのに必要なしだと思われていた。人間は信仰と祈祷によって自然を超える力を持てると思っていた。毎年何千もの人たちがルルド（フランス南西部の町、羊飼いの少女に聖母マリアが現われて以来聖地となり、また同時に諸病をいやす泉がわき出て巡礼者を集めている）に行くことが、その信仰がまだ行われていることを示している。それが行われているのはカトリックの国だけではない。私が前著で書いたインドのスワミー（ヒンドゥー教の学者・宗教指導者に対する尊称）、ラマナ・マハルシ氏（1879～1950、南インドの聖者）は、奇跡を起こす力を持っていることを断固として否定していたが、それにもかかわらず、彼に帰依している人たちは奇跡を彼のせいにした。まるで、奇跡を信じたいという欲望は人類の本能であるかのようだ。

イエスが信仰療法を行なう人だったのは間違いない。そういうのは昔からずっとあった。私の家から歩いて5分とかからないところに評判の信仰療法師がいて、貧しくて無知な人だけでなく、高級車に乗ってやって来る男や女が長蛇の列をなしてかかっていた。彼の成功は大問題で、患者を取られそうな近隣の医療従事者たちは、必要な資格を持たずに開業しているかどで何とか彼を告訴することができた。彼は有罪になって、法により営業停止を余儀なくされ、家売って出て行った。

はりつけの後もイエスに忠実であり続けたような弟子たちは新しい信仰を伝えるために出かけ、Q資料として知られている資料を使信（宣べ伝えるキリストの福音の内容・教え）の基として使ったと考えたいだろう。今や、人前で話し慣れている人は皆、聴衆の興味を高めるのにストーリー性のある話をするほどいい方法はないことを知っている。キリストの教義よりも奇跡の物語を話す方が改宗者に感銘を与えられるとしたら、それは当然だろう。伝道者たちが、イエスに奇跡を行う力を与えることでその力と栄光を高めようと考えたのも無理はない。だが、何度も繰り返し物語を話す人は皆、物語をより効果的にするために自分がいかに脚色しがちかを分かっており、最終的には、その物語の基になった出来事はほとんど残らないのだ。弟子たちは東洋的な誇張する気質を持った東洋人であり、キリストのはりつけと聖マルコの福音書執筆の間の40年間に、語られた出来事が事実として受け止められるようになったことは十分考えられる。

もちろん、これは推測にすぎない。イエスが2つの奇跡を行ったとされていることにはある程度もつともらしい点はあるが、ほとんど褒められたものではない。1つは豚の話だ。「ところで、その山腹で豚の大群が飼われていた。悪霊たちは皆、彼に懇願して言った、「私たちをあの豚たちの中に送って、あの中に入れるようにしてくれ」すぐにイエスは彼らに許可を与えた。汚れた霊たちは出て行って豚たちの中に入った。豚の群れは、険しい土手を下って突進し……海でおぼれ死んだ」恐ろしい話だ。もう1つはイチジクの木の話だ。マルコが語り、マタイが繰り返したものだ。「その次の日、彼らがベタニアから出て来た時、彼は空腹を感じた。はるか遠くでイチジクの木が葉をつけているのを見て、そこに何か見

つかるかも知れないと見に行った。そこに来てみると、葉のほかには何も見つからなかった。イチジクの季節ではなかったからである」イエスがイチジクの木を呪ったので、枯れてしまった。気難しく、怒りっぽい行動で、イエスの性格でないのは確かだ。この2つの話は嘘っぽい。

何年も前、カトリック信者であるフランス人の友人が私に教えてくれたところによると、共通の知り合いの著名な高位聖職者が私のことを信仰との距離が紙巻きタバコの紙ほどの厚さの人間だと言っていたというのだ。彼の期待は、その言葉通りだとすれば、満たされない運命にあった。私はキリスト教信者ではない。私は4つの福音書を何度も繰り返し読んで感動を覚えた。世界で最も偉大な話が語られている。だが、私は他人の信仰に手をつけるつもりはない。私はウィリアム・ジェームズ(1842~1910、アメリカの哲学者・心理学者)の『プラグマティズム』(*Pragmatism*, 1907)が最初に出版された時に読んだのを覚えている。ちょっとした評判になった。よく書かれていて、理解しやすかった。観念が真理であるというのはその観念が働く力をもっているということであるという著者の主張は私たちの感覚にそぐわないところがある。「真理は思考の過程における方便にすぎない」G.E.ムーア(1873~1958、イギリスの哲学者)が言うように「ジェームズ教授は、観念というものは(それを信ずることが我々の生活にとって)有益であるかぎりにおいて真であるということだけではなく、観念はそれが真であるかぎりにおいて有益であることも主張しようとしている」大概の哲学者は必死になってジェームズの理論を攻撃したが、私の知る限り、今ではほとんど重要視されていない。だが、彼の最も激しい批判者でさえ、間違った思想が有益なこともあることを認めてきた。あえて言えば、その一例はキリスト教の信仰だ。人類が地球の表面を覆い始めた更新世(地質時代の区分の1つで、約258万年前から約1万年前までの期間)以来ずっと、人の一生は不潔で獣じみて短かった。概して、今でもそうだ。世界の多くの地域で、人々が餓死の危機に瀕している。私たちが文明国と称する地域では、何らかの理由で恵まれた人々を除いて、人間は生きていくのに十分な金を稼ぐために退屈な職業に従事し、喜びのない生活を送っている。もちろん、私も人々が100年前に比べて長生きしていることや、無料で医療を提供している国があることは知っている。そういう国では、雇用者に労働に対する適切な報酬を与えることに成功した。また、型通りの教育を無料で受けられる。さらに、まともな服、蓄音機、テレビ、スクーターや自転車を買うことができる。人々は、学校を卒業すると、炭鉱や工場で、人夫、ごみ収集人、道路清掃員、下水道作業員として、あるいは、バスの車掌、機関手、火夫、ウェイター、郵便配達員などとして、一生働きに出なければならない。洗練されたレストランで食事をしていて、ウェイターが自分では味わうことのないジューシーな料理を手渡してくれる時、なぜ彼は私を嫌いにならないのだろう、どうして中身を私の顔に投げつけずにいられるのだろうと私はしょっちゅう自問する。実際、私はサービスを提供してくれたウェイターにこの質問を投げかけたことがある。彼はにやっと笑ってうなずいた。大勢の人々が日々の仕事のやりきれない単調さから逃れることができるのは、性的本能が活発になってあさましい淫行にふけることができる比較的短い期間だけなのだ。彼らは貯金できるのだろうか? ほんのわずかだ。彼らはすぐに年を取り、ほとんどの場合、年を取って働けなくなると、わずかばかりの年金で間に合わせなければならない。祈祷書が言うように、彼らが真面目に学んで働いて自分の生活費を稼ぎ、呼び寄せたくれた神が喜ぶような生活の仕方では義務を果たすことができるとしたら、確かに結構なことだ。彼らが来世で報いを受けると信じることができるとしたら、確かに結構なことだ。

私は、キリスト教が、長い間最も危険なライバルであったミトラ教（古代ローマで隆盛した太陽神ミトラスを主神とする密儀宗教）のように死滅する日が来ると考えている。今のところ、現存する宗教でキリスト教に取って代わるものはない。もし人間が、人生の恐怖と折り合いをつけるために、宗教を持たなければならないような体質であるならば、新しい宗教を考案しなければならない。それができなかつたら、絶望からの逃げ場はどこになるのだろうか？ 科学だろうか？ 科学は専門家以外が扱うには専門性が高すぎる。哲学だろうか？ 哲学は難しい知識の一分野であり、哲学者はそれを哲学者に任せるべきだと主張しがちだ。彼らが正しいとしたら、残念なことだ。過去においてはそういう態度ではなかった。並みの知性の持ち主なら誰だって、プラトン（427～347 B.C.、イデア論を説いた古代ギリシャの哲学者）、アリストテレス（384～322 B.C.、古代ギリシャの哲学者、プラトンの弟子）を理解できるし、注力すればプロティノス（205?～270、エジプト生まれのローマの新プラトン主義哲学者）だって理解できる。パークリー（1685～1753、アイルランドの哲学者・聖職者）やヒューム（1711～76、スコットランドの哲学者）の出した結論は受け付けられないかもしれないが、彼ら書いた文章はとても明快で、その意味を理解できないはずはない。何はともあれ、彼らの優雅な散文を楽しみながら読むことはできる。だが、最近になって、哲学者たちは一般の読者ではなく、ほかの哲学者に向けて書くようになった。彼らは哲学者しか扱えない一連の難解な意見を表明している。生き方について質問すると、それは倫理学の範疇で自分たちは関係ないと彼らは言う。彼らがそのことから逃れるのは許されないと思う。まるで、ロンドン市議会が理由を明かさずにテムズ川にかかる橋を破壊し、ロンドンの住民にどうやって川のこちら側からあちら側に行けばいいのか尋ねられると、「我々には関係ないことだ」と答えるようなものだ。今や、私たちは皆、地球が惑星であることを知っており、この分野の識者たちは地球が約40億歳であり、10億年単位で数えられるごく遠い将来、地球上の生物は滅びるだろうと言っている。それよりずっとずっと前に、今私たちが話している言葉は忘れ去られ、学者たちは苦勞した青年時代が報われて、ハムレットの独白の意味を理解できると言って得意になるだろう。その時には、パルテノン（ギリシャのアテネのアクロポリスの丘にある女神アテナの神殿）の遺跡以外、地球上には何も残っておらず、人間の存在が無意味なエピソードに過ぎなかったことが分かるだろうが、それを理解できる者はいないだろう。

天文学者たちは、銀河系だけでも100万個以上の星が惑星を持っており、地球上と同じ条件が存在するとすれば、その上に生命体が存在し、同じように進化しているはずだと言う。強力な自然淘汰の過程が始まっているはずだ。人間は地球上での生活に合わせるように発達してきたのだから、惑星上で同じような原因が同じような結果を生み、人間というか、人間と同じくくろみで創られた創造物が、私たちが自分たちの惑星に存在するのに適しているのと同じように、ほかの惑星に存在するのに適するようになるの考えるのはもっともだというしかない。もし彼らが私たち同様うまくやれないとしたら、見通しは暗い。

ここは、私が、今やイギリスの歴史の一部であるウィンストンの活動を語る場ではない。彼は再び保守党に加わったが、トーリー党は相変わらず彼を疑いの目で見ている。第2次世界大戦が勃発した時、

首相のチェンバレンは世論に押されてウィンストンに海軍省でのかつてのポストを与えざるを得なかった。ちょうどその時に、どうして私が彼と一緒にいたのかは覚えていない。私はウィンストンにお祝いを言った。彼はにやっと笑って言った。「彼は私を必要としていなかった。彼は戦争が起こらないことを願ってギリギリまで待っていたし、私を内閣に入れたくなかったのだ。彼は宣戦布告されるまで、私に迎えを寄こさなかった」2, 3 か月後、チェンバレンは辞職し、当時 65 歳になっていたウィンストンが首相になった。戦争は遂行され、勝利した。

6 月に総選挙が行われることが決まった。甥のロビンはウィンストンの末娘メアリーと友達で、二人は開票結果を聞いた後、フォア・ハンドレッドに行き、確信していた勝利を祝って踊るためにダウニング街で食事しようと決めていた。二人は意気揚々として会った。衝撃が待ち構えていた。その時点から労働党は予想外に多くの議席を獲得し続け、やがてウィンストンは自分が圧倒的多数の差で負けていることを認識した。「でも、私は最善を尽くしたんだ」と彼は言った。「私の名前は歴史に残るだろう」ロビンとメアリー・チャーチルは若者らしく気にもしないでフォア・ハンドレッドに踊りに行った。世間一般はチャーチルの敗北に驚いたと思う。勇気と粘り強さで国を救ってくれた彼をそんなふうに切り捨ててしまうのは、イギリス国民の方がひどく恩知らずのように思える。

自然というものは、人間に見返りを求めずに素敵な贈り物をするのはめったにない。人間は、その見返りが自分でできるものだったら、感謝しなければいけない。ウィンストンは自己中心的だった。だからこそ、政治生活の初期に彼は必要以上に自分で物事を難しくしたのかもしれない。彼には他人に対する思いやりというものがほとんどなかった。首相として1日の仕事が終わると、彼は6時にベッドに行き、夕食の時間までぐっすり眠るのが習慣だった。それから少しするとリフレッシュして仕事をしなくなり、参謀たちを呼んで彼らが翌日朝早くから仕事をしなければならぬのも顧みずに朝の1時か2時まで議論を続けさせた。彼は愚かさにはほとんど我慢がならず、自分に賛成しない人間を愚かだと思いがちだった。彼は寛大ではなかった。かつて、彼が初めて海軍省に行った時、海軍士官が頼みごとをしに来た時の様子を話してくれた。私はそれがポストのことだったか、命令のことだったか、海岸の任務だったか忘れてしまった。彼はハロー校にいた時、容赦なく自分をいじめたこの男と一緒にいた。「彼は私の人生をみじめなものにした」と彼は言い、それから目をきらめかせると、よくやるように「ま」（原文は 's'）を不明瞭に発音して付け加えた。「彼の頼みを却下してどんなにみゃんぞく（満足、原文は *shatishfaction*）だったか口では言えない」ウィンストンには大抵の人間に共通のある種の要素が欠けていたのだと思う。彼は強い愛情を持つことができなかつたのではないだろうか。

ウィンストンが冷たくて情のない人間だという印象を与えたとしたら、それは大きな間違いだ。それどころか、彼は非常に感情的だった。1910年、ゴールズワージー（1867～1933、英国の小説家）が『正義』（*Justice*, 1910初演）という戯曲を上演し、チャーチル夫妻に観に来るよう招待した。それは感動的な芝居で、クレミー（チャーチル夫人）はあふれるほどの涙を流した。彼女がひどく取り乱したので、当時内務大臣だったウィンストンは、その芝居がそんなに強く引き起こした状況を調べるべきだと考えた。その結果、彼は前國務大臣が見過ごしていた囚人の取り扱いの改革を実行した。彼は独居房を廃止したのだ。

やがて、再び総選挙が行われ、保守党が政権に返り咲いた。ウィンストンは再び首相になった。だが、彼は 78 歳の年寄りで、耳が遠く、国政を扱うのは困難でしかなかった。結局、彼は辞任した。それ以来ずっと、彼は非常に多くの時間をリヴィエラで過ごし、私もそこに住んでいたの、旧交を温めることができた。ある日、彼がやって来て私と一緒に昼食を食べた。彼が来ることを新聞が知り、膨大な発行部数の写真週刊誌『パリ・マッチ』がパリから電話を寄こして彼と私の写真を撮るために最高のカメラマンを行かせると言ってきた。きっとウィンストン卿は腹を立てるだろうと私は言って、彼らが私の所有地に入るのを断わった。昼食の知らせを待っている間、私がやったことをウィンストンに話すと、彼は思ったほど喜ばなかった。思い切って言うが、世間の注目に慣れてしまうと、それがないと少し物足りなく感じてしまうのではないだろうか。

次にウィンストンがやって来て私と一緒に昼食を食べた時、私は大勢のカメラマンを来させて、ウィンストンが到着するところ、ウィンストンが車から降りるところ、ウィンストンが私の家に入るところを撮られ、昼食後はリクエストに応じてカメラマンが次から次と写真を撮る間、ウィンストンと私はテラスに座っていた。彼は極めて上機嫌でそれに耐えた。

それほど前のことではないが、何か月かウィンストンと会っていなかったの、ある晩、彼が泊まっている家の友人たちと一緒にロクブリュヌで食事をしないかと誘われた。私が客間に入ってウィンストンに近寄って行くと、彼は大きな肘掛け椅子にふんぞり返っていたが、私は握手しようと手を差し出した。彼は両手で私の手を取って言った。「ああ、君、また会えてよかった」彼は概してあまり感情を表に出さないのに、ひどく熱っぽい口調で言われたので、私は感動して、大いに自制心を働かせなかったら、少しばかり涙が私のしぼんだ頬を滴り落ちたと思う。泊まっていた家の主人たちが彼を親切に扱い、彼を楽しませたり面白がらせたりし続けるよう気を配り、彼に対して深い愛情を感じていたにもかかわらず、彼は孤独を感じる瞬間があった。多忙だった過去から 1 人の人物、それも大して重要でない人物が現れたことが、彼が自らの勇気と決断力でわが国民を鼓舞していたイギリスの最も暗い時代の日々を、彼の心に思い出させたのかもしれない。1 つかそこの作品で端役だった昔の喜劇役者に偶然出会って、自分が人気者だった日々を思い出して懐旧の痛みを感じるかつて世界的に有名だった年配の俳優も同じかもしれない。

彼の 80 歳の誕生日を祝うためだったと思うが、下院の議員たちが寄付をして、私の肖像画を描いたことでかなりの名声を得ていたグラハム・サザランド (1903~80、イギリスの画家) に彼の肖像画を描かせた。肖像画家には 2 つのタイプがあって、モデルのことを第一に、その次に自分のことを考える画家と、自分のことを第一に、その次にモデルのことを考える画家だ。グラハム・サザランドは自分のことを第一に考える画家だ。モデルとして座ったのはウィンストンの家だった。簡単にはいかず、サザランドは、自分が帰った後、自身が画家でもあるウィンストンが自分の筆で手を加えているのではないかと疑った。完成すると、肖像画はサザランドの別荘に持って行かれ、クレミーと私はそれを見に昼食に来ないかと誘われた。昼食を食べ終わると、私は肖像画が置かれている屋根裏部屋に彼女を連れて行き、二人とも初めてそれを見た。私は気に入る、その時は彼女もそうだった。だが、ウィンストンはそれを見て激昂した。彼の批判は辛辣なものだった。当初、彼は贈呈式で展示されるのを拒否していたが、彼の意志に反してそれが行われた。やっとのことで肖像画が彼の家に送られると、彼はそれを目に触れな

いところに置かせた。彼が肖像画を壊したと知っても、私は驚かなかっただろう。サザランドが見たように子孫が彼を見ると思うと、彼は耐えられなかった。どうして彼がそんなに侮辱を感じたのかは分からない。構図にあまり満足でなかったのかもしれない。サザランドはいつも脚を描くのに苦労していることを認めると思う。だが、頭は見事にできているのは確かだ。私が見たところ、大きな眉、太った顎、険しい表情は、彼を最高の勝利の開拓者にした勇猛な決断力、不屈の勇氣、機動力をあらわにしている。どんな偉人にも欠点はあると思う。彼が持っているとは誰も思わない欠点である虚栄心がサザランドの肖像画によって深く傷つけられたのだ。ウィンストンは決してサザランドを許すことができず、1,2年後、私の家である絵を目にして誰が書いたかと尋ねるので、私がサザランドだと言うと、彼は怒って顔をそむけ、言った。「見たくもない」

この長い話の中で、私は自分の見下げ果てた姿を見せているのは分かっているが、もし私が書いたとすれば、それはあまりにもたびたび眠れぬ夜の原因になった記憶を取除くためだ。というのも、忘れられない思い出を払いのける確実な方法は、それを書き留めることだということを私は経験から学んだからだ。そういう理由で、私は『人間の絆』を書いた。私は劇作家として人気の絶頂にあり、興行主たちは私に戯曲を書いてくれとうるさくせがんだ。私は彼らにしばらくの間はもう書かないと言って、小説を書くのに2年を費やした。書き終わると、私は自分を悩ませ続けてきた苦痛から解放されていた。

私は、対象にして書いた世代が過去のものとなっても、作家の文章を生き続けさせるものはずばり何なのかと自問したことがある。最もありそうもないことが起こるものだ。ボルテール(1694~1778、フランスの啓蒙思想家)が生み出した膨大な数の作品の中から、唯一残っているものが『カンディード』(Candide, 1759)だなどと、誰が考えただろうか？ ジョージ・エリオット(1819~1880、イギリスの作家)の堅実で知的な小説が忘れ去られていく一方で、ギヤスケル夫人(1810~65、イギリスの小説家)の『クランフォード』(Cranford, 1853)が相変わらず楽しまれているなどと、誰が考えただろうか？ 好みは文学とは関係のない出来事によって変わる。だから、領土のどこかが常に太陽に照らされていた大英帝国が安定感のないイギリス連邦になると、かつては驚くほどの人気を誇ったラドヤード・キップリング(1865~1936、イギリスの小説家・詩人、イギリス統治下のインドを舞台にした作品で知られる)の小説は今、不当に無視されているのだ。

2,3年の内に、私の小説がもはや興味を引かなくなって、私は忘れ去られてしまうかもしれないが、少なくともいくつかは喜んで読み続けられるかもしれない。その場合、それを書いた著者がどのように欠点が多く苦悩に満ちた人間だったか知りたいと思う読者がいるかもしれない。私はシリーと結婚した時、間違いを犯した。もし私が断っていたら、彼女は恐らく危険でない程度の自殺を試みていただろう。彼女はすでにそういうことを2回やっていた。1つはすでに書いた。もう1つはカンヌ(フランス南東部の避寒地)で、フランス人の愛人が彼女と関係を絶って、彼女は中二階の窓から身を投げたが、両手首を折ることに成功しただけの時だ。彼女は十分に生きていけたらろうし、やがて裕福な株仲間か、もっとよければ、チェーンストアの経営者と結婚して、その賢さとセンスと行動力で貴重な存在になっただろう。私たちは共通のものが何もなく、私は「正しいこと」だと考えることをやったが、彼女にも、私にも幸福をもたらすことはなかった。

シリーが私と離婚した時、私は 55 歳で、彼女は 50 歳だった。その後の 10 年間、私はとても楽しい人生を送った。私はフランスで有名になっていて、短編小説や長編小説が翻訳されて出版された。戯曲もいくつか上演されて成功した。パリに住んでいたジェラルド・ハックストンを通じて多くの賢くて面白いフランス人と知り合いになり、時にはリヴィエラで彼らが私と 2,3 日過ごすこともあった。私は常に客を歓待した。H.G. ウェルズ (1866~1946、イギリスの小説家)、アーノルド・ベネット (1867~1931、イギリスの小説家・劇作家・評論家)、デズモンド・マッカーシー (1877~1952、イギリスの文芸評論家・ジャーナリスト)、揃って哲学者の C.M. ジョード (1891~1953、イギリスの哲学者) とアーウィン・エドマン (1896~1954、アメリカの哲学者) など、今では忘れ去られてしまったが、良き仲間たちが私のところに泊まりに来た。ジェラルドは私の原稿をタイプし、増え続ける手紙に対処してくれた。私たちは引き続き旅行にも出かけた。最近、カリブ海 (中米・南米・西インド諸島間の海域) で一冬過ごしていたラドヤード・キップリングが、あそこの島々には、彼には書けないが、私なら書ける話がたくさんあるという趣旨のことを言ってきた。私は彼が自分の言っていることを理解していると確信したので、二人で出発した。私たちはマルチニーク島、グアドループ島、ドミニカ連邦で数週間過ごした。それぞれに書くに足る話があったが、私にも書ける話ではなかった。私たちはフランス領ギアナに行った。ジェラルドのフランス人の友人を通じて、カイエンヌに滞在する許可を取ってあった。恐ろしい経験だった。総督が一軒家と私の世話をする囚人を 2 人提供してくれた。彼らは 2 人とも殺人犯だが、恐れる必要はない、と彼は言った。全く無害だと。しかしながら、夜は用心して寝室に鍵をかけた。この後、私たちは再びマレー半島に行き、また別の機会にはインドに行った。私はそこに行くのを躊躇していたのだが、それはインドを背景にした話はすでにキップリングが書けるだけ書いてしまったと思ったからだった。やっとの思いで行ってみると、彼はあの広大な国の一面を扱っただけで、作家がうまく使えるものがまだたくさんあることが分かった。だが、残念ながら私には遅すぎた。私は年を取っており、もはやたまたま聞いた話や偶然の出会いから話を作り出す力がなかった。

私は時が自分を蝕んでいることを何となく感じていた。私は庭にテニスコートを持っていて、よくテニスをやったものだ。私がおいしいお茶を出してたっぷり飲ませるものだから、よくプロに近い人たちがモンテカルロ (モナコ北東部の保養地) からやって来たがったものだ。ある日、その内の 1 人がもう 1 人に私のことを言っているのが聞こえた。「あの人の年にしては、そんなにまずいテニスではないよ」私はこれではだめだと思ったので、永久にテニスをやめた。私はずっとダンスが好きで、ある時、ニースのダンスパーティーに行かないかと誘われた。私はあるとてもかわいらしい女性にダンスを申し込んだ。私たちがワルツを踊りながら部屋の中を回ると、彼女は大きくてきらきらした美しい目で私を見てフランス語で優しく尋ねた。「本当にお疲れじゃありませんの、先生？」私は彼女を元の場所に連れて行き、二度とダンスをしなかった。私は 66 歳だった。

第 2 次世界大戦が勃発した。私はイギリスへ飛んだ。そこに長くはいないうちに、フランス国民の戦争行動に関する一連の記事を書くためにフランスに戻るよう依頼された。私はフランス海軍と 1 週間過ごし、工場を視察し、シャラント川 (フランス西部を流れる川) まで車で行って、アルザス・ロレーヌ (フランス北東部の昔からドイツと領有を争った地域) から避難してきた不幸な人々がどのような状況で生活しているのか調べた。私はあちこちに行き、恐ろしいほど落ち着き払った将軍たちにもてなされた。マジノ線 (フランスの東部国境を守るために第二次世界大戦前に建てられた防壁) に行き、要

塞の1つで一晩過ごした。指揮官は難攻不落だと保証してくれた。不幸なことに、彼は間違っていた。私の記事は最終的に小さな仮綴じ本になって出版された。それは10万部売れた。自分にできることは大してないと思えた頃、私はフェラ岬に戻った。ポール・レノー（1878～1966、フランスの政治家、1940首相）がラジオで口ごもりながら、フランスが敗北を受け入れたことと、ペタン元帥が休戦条約に署名する予定だということを発表した時、私はそこにいた。私は泣いた。その時、私がどのようにしてフランスから逃れたかは、短い本『極めて個人的な話』（*Strictly Personal*, 1941）の中で述べた。私はイギリスに着いた。しばらくして、私はアメリカでとても好まれていたので、英米関係を改善するために何かできるだろうと期待されて派遣された。ほとんどうまくいかなかった。私はあちこちで講演をしたり、記事を書いたりした。指示を受けて、私は『サタデー・イブニング・ポスト』紙に「なぜあなたたちは私たちが嫌うのか？」（*Why Do You Hate Us?*）と題した記事を書いた。私は厳しい非難の回答を7,000件ほど受け取った。1つだけ覚えているのは、ケリーという紳士からのもので、「あなたは私たちがボイン川の戦い（1690年にイングランド王ウィリアム3世が復位をねらうジェームズ2世と彼を支援するアイルランドのカトリック勢力を破った戦い。これによりアイルランドのプロテスタントによる支配が強化された。その後、1841年から1851年にかけてジャガイモ飢饉が起こり、アメリカなどへ約200万人以上が移民したと言われている）を忘れることができると思いますか？」と書いてあった。（1942年に連合国軍が）アラメインの戦いで（ドイツ軍に）勝利した。戦いに勝つことだけが価値のあるプロパガンダだと私が悟るのに長くはかからなかった。合衆国が参戦すると、私の仕事は終わった。私はサウスカロライナ（アメリカ南東部大西洋岸の州）に引きこもり、そこに親友で出版業者のネルソン・ダブルデーが自分の地所にバンガローを建ててくれた。

ジェラルド・ハックストンはフランスに留まって、私の家の面倒を見、絵画が安全な場所に置かれるよう気をつけていたのだが、ほかのアメリカ人たちと一緒に船でニューヨークに到着した。彼は少しの間サウスカロライナの私の家に泊まった後、彼の言語の知識が役立つかもしれないというので、ワシントンで職を得たが、危険な病気にかかってしまい、ニューヨークの療養所に連れて行かれた。私は彼を見舞いに行き、医者たちと会った。彼らは励ましてはくれなかった。彼を看護師や医者だけと残しておく訳にもいかないのだから、私はニューヨークに留まろうと決めた。彼は長い闘病生活を、勇気をもって機嫌を損ねることなく耐えた。彼はずっと大変な読書家だったが、私は彼が望む本をすべて提供することができた。とうとう、医者たちは彼の命を救うには手術をしなければいけないという結論に至った。手術は行われたが、4日後に彼は亡くなった。52歳だった。

彼の死は私にとってつらく悲しいものだった。私たちは共に非常に多くの経験をしてきた。彼には重大な欠点があった。大酒飲みで無鉄砲なギャンブラーだった。大きな長所もあった。計り知れない生命力があった。怖いもの知らずだった。いつだって冒険する用意があり、頑固な管理人を説得して分別をわきまえた行動をさせることだろうと、未開地でおいしい料理を作ることだろうと、何にでも取りかかることができた。ある時、サラワク（ボルネオ島北西部にあるマレーシア連邦の州）で川を下っていると、私たちのボートがボア（浅い所で高潮が衝突する時あるいは三角口状に開いた河口に高潮が押し寄せた時に見られる高い波）と呼ばれている高波をかぶって沈没し、私たちは水中に放り込まれた。私は溺れそうになった。ジェラルドが私の命を救ってくれた。あらゆる人たちと親しい関係になれる彼の才能は、私にとって計り知れないほど役に立った。彼がいなければ、私が書いた小説の多くの材料が手に

入らなかつたらう。少なくとも一度は、彼がおあつらえ向きの話を提供してくれた。私たちはスマトラ島に行っていて、私の小説の中ではタナメラ（ニューギニア島西部イリアンジャヤ内陸部のジグル川上流に位置する町）と呼んだ場所に滞在していた。いつもの通り、私たちは白人クラブの名誉会員になった。私たちは大抵そこで食事をしたが、日没になると男たちがバーに集まり、9時になるまでダイニングルームに出て来ないので、遅い時間だった。男たちのグループとバーで飲んでいるジェラルドを待ちくたびれて、私は夕食の席に着いた。食事が終わりかけた時、ジェラルドが千鳥足で入って来た。「酔っているのは分かっています」と彼は言った。「でも、あなたのためにすごくいい話を手に入れてきました」彼はそれを私に話し、私が書いた。私はそれを『密林の足跡』（*Footprints in the Jungle, 1927*）と名付けた。あまりうまく書けなかつたと思う。それは殺人の話で、出版されると、評論家の中にはこの作品には欠点があると指摘する人がいたが、それは誰が殺人を犯したかすぐに分かってしまうからだった。だが、私は推理小説を書こうとしたのではなかつた。私が興味を引かれたのは全く違うことだった。女とその愛人が女の夫を殺したが、二人に罪を自覚させることはできなかつた。地域社会の一員である農園主、商人、周旋屋、医者——そして、その妻たち——は事実をよく知っていたが、引き続き未亡人やその愛人とは仲良く暮らしていた。二人は結婚し、要するに、いつまでも幸せに暮らした。私は二人と知り合いになったら、とても感じがよかつた。彼らは親切でもてなし上手だった。私は彼らが良心の呵責に苦しんだことはなかつたと確信した。彼らは非常に優しくかつたから、好きにならずにはいられなかつた。人間性とは実に妙なものだ。

戦争が終わってから、私はフェラ岬のわが家に戻った。家はめっちゃめっちゃだった。丘の頂上には信号装置があり、その破壊にはイギリス海軍が関わっていた。彼らがやったことは、公式には至近爆撃と呼ばれるもので、私の家に当たったのだ。再建するのに3か月を費やしたが、それ以来ずっと住んでいる。私はもう小説は書かない。私はかなりの年寄りだ。だんだん耳が遠くなってきた。記憶力は探している言葉を思い出せないまでになっている。若さの特権である創造力を失い、創造的な日々は永久に失われてしまった。私にはふさわしくないかもしれないが、私には30年来の友人がいて、私の孤独を和らげ、病気の時には私の世話をし、私の名声——悪名の方がよければ、それでも構わないが——が高まることでもたらされる孤独への侵入者から私を守り、私に届く無数の手紙に答え、残り少ない私の人生を幸福で快適に過ごさせるために、喜んで自分の人生を捧げてくれている。

あとがき

1,2年前、元気とは程遠く、疲れて気分が沈んでいたもので、私は環境の変化が必要だと感じてベニスに行こうと決めた。ベニスは私の知る限り、何回行っても、また行った時に、未経験で興奮しやすい状態で初めて行った時と同じくらい圧倒的な美しさに衝撃を受ける唯一の場所だ。



私はグリッティ（ホテル）ではよく知られていて、好意的な歓迎を受けた。支配人は私を大運河に面した部屋に案内してくれたが、その部屋は私が望む時には私のために予約されているのだ。荷解きが終わって、バーに下りて行くと、旧友のバーテンが私と握手して、注文も聞かずにドライマティーニを出してくれた。夕食に行くと、テーブルの上に私がいつも飲んでいるワインが1本置いてあった。私は旅で疲れていたのだから、早く寝た。翌朝、朝食の後、ベニスでの初日はいつもそうするように、少し歩いて、乗り合いバスとしてベニス人の役に立っている小型汽船のヴァポレット（ベニスで運航されている水上バス）が止まる場所まで行き、アカデミア美術館に行く切符を買った。私はしばらくの間よく知っている絵を見て過ごした。また魅力的なベッリーニ（1430～1516、イタリアのベネチア派の画家）の絵を見て心が癒された。ジョルジョーネ（1477～1510、イタリアのベネチア派の画家）の『テンペスタ』は額を付け直してあった。うっとりするような感動的な小品だが、私はその魅力が何にあるのか発見できない。私はカルパッチョ（1465頃～1525頃、イタリアのベネチア派の画家）の絵を興味深く感心して見つめたが、有頂天になるのは控えた。最後に、長い展示室に行くと、片方の壁の端にヴェロネーゼ（1528～88、イタリアのベネチア派の画家）が描いた『レヴィ家の饗宴』という巨大な絵があった。壮麗な作品だ。イエスが長い食卓の中央に座り、イエスから見て右に聖ペテロが、左に愛弟子のヨハネがいる。そのほかの弟子たちは食卓の周りに散らばっており、一緒にいるのは、恐らく主人のレヴィと、招待された友人の収税吏や不信心者たちだろう。私は疲れた。巨大な部屋の中央に非常に長い暖房器があり、その両端には公衆の便宜を図って18世紀のモデルをコピーした木製の椅子が置かれていた。私はゆっくり見られるように大作に面した椅子に座った。その絵は10ヤードか15ヤード先にあったので、私はもっとよく見ようと遠近両用の眼鏡をかけた。イエスの横顔を見て、ヨハネが意気込んで話すのを聞くために顔を向けたのだと言う人がいる。あの時は、驚いたことに、イエスが私の方に顔を向けて、まるで私を見つめているかのようだった。私は自分の目が信じられなかった。私は目を閉じて、自分の足を見るかのように顔を伏せた。1分後にまた目を開けた。今となつては、イエスがもう一度ヨハネが話すのを聞くために顔を向けるのを見たのか、それともちょうど顔を向けかけているところを見たのか思い出せない。これには私も大層困惑したので、眼鏡を外して立ち上がり、絵の方に歩いて行った。3歩も歩かないうちに、最初に座った時のように、横顔のイエスはヨハネの話を聞いているようだった。もし私が法廷で宣誓の上、イエスが私の方に顔を向けるのを見たのかと尋ねられたら、「はい」と答えた

だろう。もしその時、イエスが顔を向けるのを見たと信じているかと尋ねられたら、「いいえ、もちろん信じていません」と答えただろう。もしそのことについて、2つの陳述の整合性を尋ねられたら、軽く肩をすくめるだけで、「目の錯覚だったのでしょうか」と言うだろう。何しろ、前にも言った通り、私は元気とは程遠く、疲れ切っていたのだ。私はこの不思議な経験をした日付を書き留めておいた。1958年4月20日のことだ。